

京都府埋蔵文化財情報

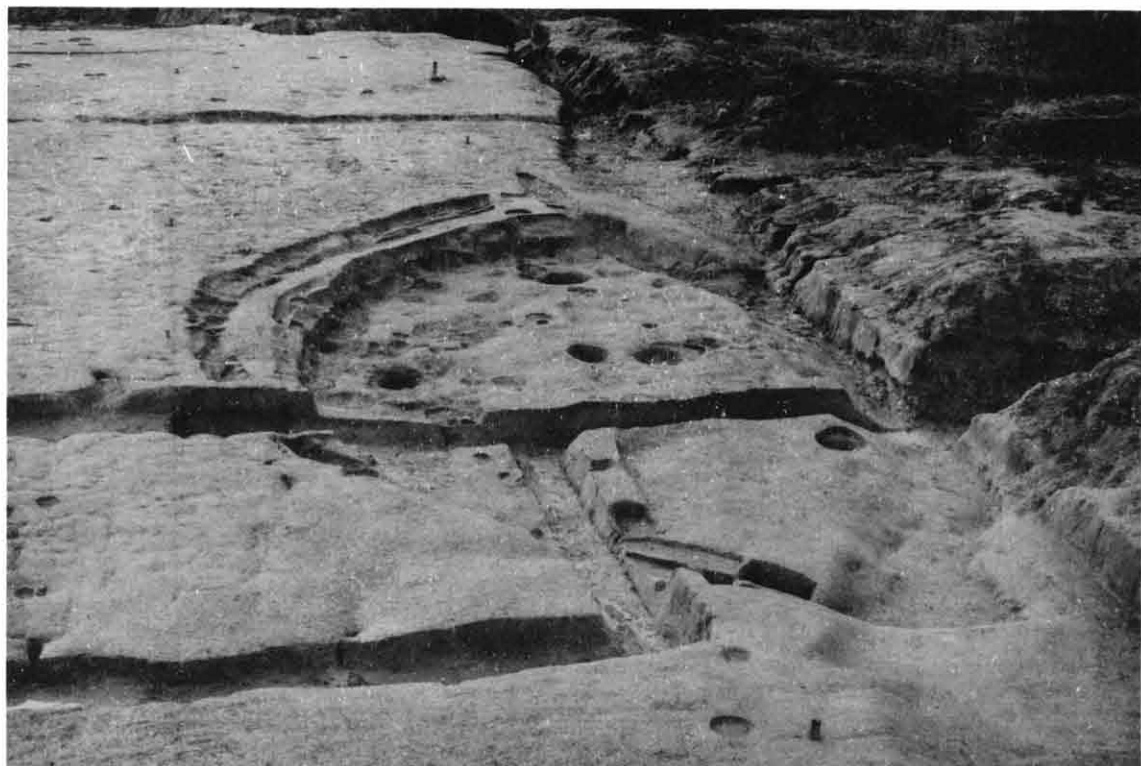
第 36 号

平成2年度発掘調査予定の遺跡	奥村清一郎	1
平成元年度京都府内埋蔵文化財の調査	小山 雅人	8
阿婆田窯跡群の発掘調査	森 正	17
桑飼上遺跡の竪穴式住居跡	細川 康晴	23
平成元年度 上人ヶ平遺跡の調査	石井 清司・伊賀 高弘	30
—平成元年度発掘調査略報—		36
20. 里 遺 跡	24. 千代川遺跡第16次	
21. 仏南寺城跡	25. 中海道遺跡第17次(3NNANK-17)	
22. 天若遺跡	26. 内里八丁遺跡	
23. 八木嶋遺跡	27. 興戸遺跡第6次	
資料紹介 遠所遺跡群出土の銅鏃	増田 孝彦	49
府下遺跡紹介 47. 御上人林廃寺		50
長岡京跡調査だより		53
センターの資料活用事業		57
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧		63
センターの動向		64
受贈図書一覧		66

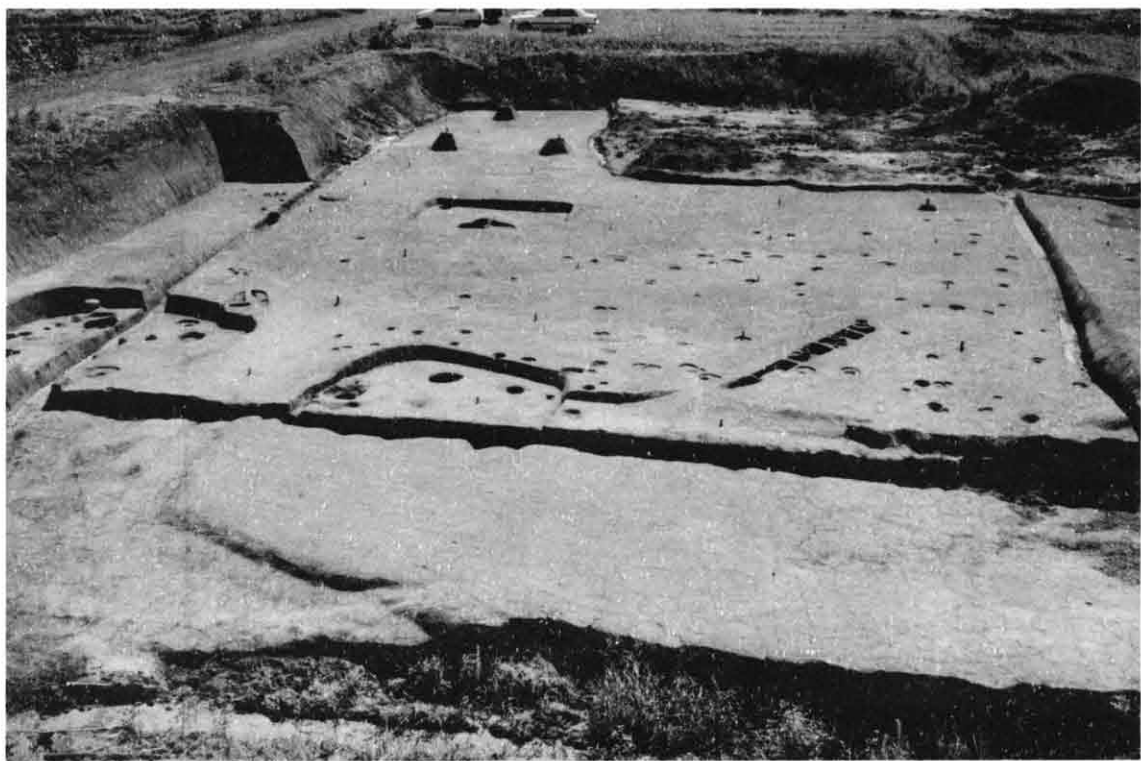
1990年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

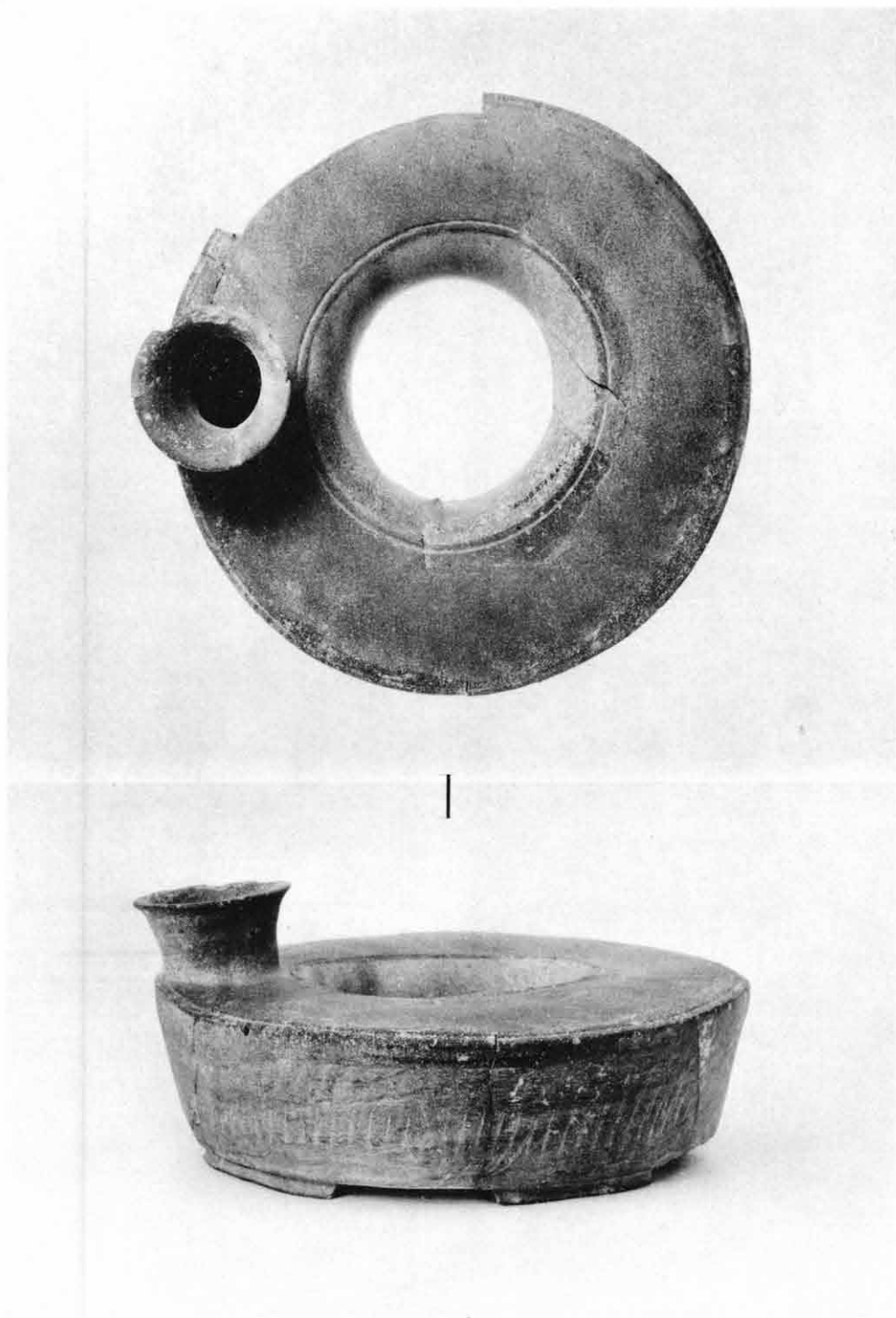
図版第1 桑飼上遺跡の竪穴式住居跡



竪穴式住居跡14



Eトレンチ竪穴式住居跡群



環状平瓶

平成2年度発掘調査予定の遺跡

奥村清一郎

京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成2年度に予定している発掘調査事業は、別表にしめしたとおり25件を数える。このうち、22件(41遺跡)については発掘調査を行い、残る3件は遺物整理・報告書作成を行うものである。発掘調査22件を調査原因となる公共事業別にみると、例年と同様道路の新設・拡幅に伴う調査が最も多く、件数にして11件、調査対象面積にして32,200m²を数える。これに次ぐのが宿舎・庁舎の建設に伴う調査で、6件・4,250m²が予定されている。このほか、河川改修・農地造成・ダム建設・学校建設・住宅団地造成に伴う調査各1件がある。これらの発掘調査を実施するにあたっての事務局の体制は、昨年度同様3課6係体制(職員総数42名)で臨むことになった(63ページ参照)。以下、今年度調査予定の遺跡について略述する。

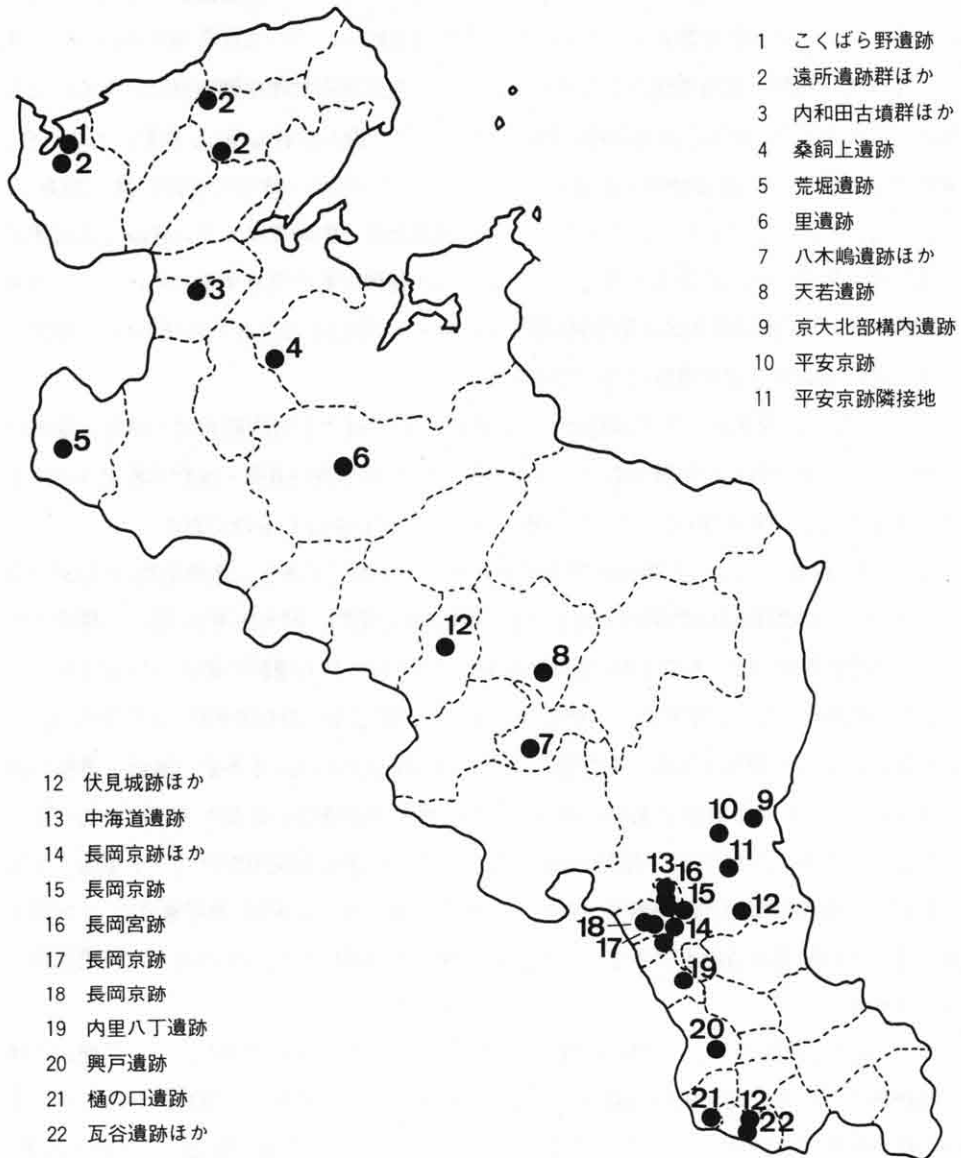
1 こくばら野遺跡は、久美浜湾にのぞむ台地上に位置する遺物散布地である。地表面に散布している土器片の特徴から奈良～平安時代の集落関係の遺構・遺物が検出されるものと推測される。国道178号バイパスの建設に伴って調査を行うものである。

2 遠所遺跡群はかは、丹後国営農地開発事業に伴う調査である。遠所遺跡群(約80,000m²)のほか、古墳群3件(弥栄町下後古墳群, 同太田古墳群, 同太田南古墳群), 経塚1件(久美浜町横浦経塚), 古墓1件(久美浜町山形古墓群)の計6遺跡の調査が予定されている。遠所遺跡群では、昨年度からの継続分を含めて円墳2基, 須恵器窯跡(奈良時代)5基, 製鉄炉跡3か所, 鍛冶工房跡, 集落跡, 炭窯跡100基前後にのぼる多数の遺跡・遺構の調査が予定されている。山形古墓群の調査は、昨年度の試掘調査の結果をもとに全面発掘を行うものである。試掘では、東西約50m, 南北約30mを測る丘陵頂部付近の平坦面上で計9基の中世墳墓が確認されており、石仏, 五輪塔, 陶磁器, 北宋銭(崇寧通宝), 土師器筒型土器, 土師皿等の遺物を伴出している。13～16世紀の間にわたって形成された墳墓地と推定される。

3 内和田古墳群はかは、加悦谷平野を南北に縦走する国道176号線のバイパス建設に伴う発掘調査である。内和田古墳群は、一辺9～14mを測る小規模な方墳12基からなる、在地系群小古墳の典型例で、このうち事業地内に含まれる4基の調査を実施する予定である。このほか、散布地1件(加悦町蔵ヶ崎遺跡), 奈良～平安時代の集落跡1件(加悦町桜内遺

跡)の調査を行う。

4 桑飼上遺跡は、由良川の改修事業に伴い、昭和60・61年度に行われた確認調査の後をうけて昭和62年度から継続して調査を実施しているもので、現地の発掘調査は今年度をもって終了する。今年度調査地は、昭和60年度に実施した確認調査の結果によると、上層では奈良時代(7～8世紀)、下層では古墳時代前期の集落遺跡に関する遺構・遺物の検出に期待が寄せられる。



平成2年度 発掘調査予定遺跡位置図

平成2年度発掘調査予定の遺跡

5 荒堀遺跡は、昭和55年度には場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文早期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が高い密度で検出された複合集落遺跡である。今回の調査は、府道の建設に伴い遺跡の中心部約500m²を発掘する。

6 里遺跡は、府道新設工事に伴い平成元年度にひきつづき調査を実施するものである。

平成2年度 発掘調査事業予定遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	種 別	所 在 地	原因工事	調査対象面積	調査予定期間	備 考
1	こくばら野遺跡	散布地	久美浜町甲山	道路建設	800m ²	6～10月	継 続
2	遠所遺跡群ほか	古墳ほか	弥栄町木橋ほか	農地造成	41,000m ²	4～1月	継 続
3	内和田古墳群ほか	古墳ほか	加悦町明石ほか	道路建設	1,500m ²	4～12月	継 続
4	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市桑飼上	河川改修	4,000m ²	4～1月	継 続
5	荒堀遺跡	集落跡	夜久野町大油子	道路建設	500m ²	7～9月	新 規
6	里遺跡	集落跡	綾部市里	道路建設	400m ²	7～9月	継 続
7	八木嶋遺跡ほか	集落跡	八木町八木嶋	道路建設	9,000m ²	4～2月	継 続
8	天若遺跡	集落跡	日吉町天若	ダム建設	2,000m ²	6～12月	継 続
9	京大北部構内遺跡	集落跡	京都市左京区	宿舎建設	250m ²	4～7月	新 規
10	平安京跡	都城跡	京都市上京区	庁舎建設	1,000m ²	6～10月	新 規
11	平安京跡隣接地	都城跡	京都市南区	庁舎建設	1,200m ²	4～9月	新 規
12	伏見城跡ほか	城館跡ほか	京都市伏見区ほか	学校建設	1,800m ²	7～12月	新 規
13	中海道遺跡	集落跡	向日市	道路建設	100m ²	11～12月	継 続
14	長岡京跡ほか(名神)	都城跡ほか	向日市ほか	道路建設	11,000m ²	4～2月	継 続
15	長岡京跡(合同宿舎)	都城跡	向日市	宿舎建設	1,000m ²	7～12月	継 続
16	長岡京跡(競輪場)	都城跡	向日市	宿舎建設	200m ²	11～12月	新 規
17	長岡京跡(府道下植野長岡京線)	都城跡	長岡京市	道路建設	900m ²	9～2月	新 規
18	長岡京跡(技能開発センター)	都城跡	長岡京市	庁舎建設	600m ²	10～2月	新 規
19	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	道路建設	4,500m ²	4～2月	継 続
20	興戸遺跡	集落跡	田辺町	道路建設	3,000m ²	4～12月	継 続
21	樋の口遺跡	散布地	精華町	道路建設	500m ²	12～1月	継 続
22	瓦谷遺跡ほか	集落跡	木津町	団地造成	9,000m ²	4～2月	継 続
23	平山城館跡ほか	城館跡ほか	綾部市ほか				整理報告
24	千代川遺跡	集落跡	亀岡市				整理報告
25	長岡京跡(外環)	都城跡	長岡京市				整理報告

平成元年度調査(A地区)では、弥生中期の落ちこみ、古墳時代の円墳周濠・方形住居跡、奈良～平安時代の掘立柱建物跡、鎌倉時代の掘立柱建物跡・井戸・溝などが見いだされている。今年度は、A地区の南側、由良川寄りの地点(B地区)で調査を実施する。調査地は、由良川に臨み、青野遺跡群、久田山古墳群に近接する好適な立地条件を備えており、複合集落遺跡に関する遺構・遺物の検出に大きな期待が寄せられる。

7 八木嶋遺跡ほかは、建設省が推進している京都縦貫道路建設事業に伴う発掘調査である。八木嶋遺跡は、丹波最大規模の横穴式石室をもつ坊田1号墳の所在する谷筋に営まれた遺跡である。元年度に実施した試掘調査によって、弥生時代から平安時代の各時代にあたる遺構・遺物が確認されたが、今年度は奈良時代の掘立柱建物跡が検出された地点の面的発掘を行い、必要に応じて下層遺構の調査を実施する予定である。このほかに、古墳1件(八木町小谷17号墳)、須恵器窯跡2件(八木町堂山窯跡・同古谷窯跡)の調査を計画している。小谷17号墳は、昨年度実施した予備調査によって当地域最古級の横穴式石室を有する円墳であることが確認されている。今年度は墳丘・石室を完掘し古墳の全容を解明する。堂山窯跡は古墳時代、古谷窯跡は平安時代の須恵器窯跡として『京都府遺跡地図』【第2版】に記載されているが、今年度は位置・基数等を確定するための試掘調査を実施する。

8 天若遺跡は、日吉ダムの建設工事に関連して、水没地区を対象とする文化財調査の一環として実施しているものである。大堰川中流に開けた河岸段丘上に位置する集落跡で、昨年度に試掘調査を行い、古墳後期の竪穴式住居跡11軒を確認したのを受けて面的な調査を実施するものである。

9 京大北部構内遺跡は、京都大学の敷地内に位置する縄文時代以降近世に至る複合集落遺跡である。今回の調査は、京都大学理学部のグラウンドの北接地において、警察官の待機宿舎の建設に伴い実施するもので、縄文・中世・近世の3時期にあたる調査成果が見込まれている。

10 平安京跡の発掘調査は、府庁構内において、職員福利厚生棟(仮称)の建設に先だって実施するものである。調査地は、平安京の左京一条三坊二町にあたる地点であり、平安時代には官衙町の一角(右衛門府)を形成していたところである。江戸時代には、道路を挟んで西側に茶屋四郎次郎邸が営まれたことが知られている。平安時代から現在に至る、豊富な遺構・遺物が累層的に検出される公算が高く、多大な調査成果が見込まれている。

11 平安京跡隣接地の調査は、平安京九条大路および、その下層遺跡である烏丸町遺跡の南接地で計画しているものである。烏丸町遺跡は、近辺の平安京跡を対象とする調査では、土坑・流路跡等の遺構に伴い、縄文土器・弥生土器・須恵器等が確認され、遺跡が平安京域以南にまで展開している可能性は極めて高い。今回の調査は、勤労者総合福祉セン

ターの建設に伴い、遺構・遺物の埋蔵状況を把握するための試掘調査として実施するものである。

12 伏見城跡ほかの調査は、府立学校の増改築に関連するものである。伏見城跡の発掘調査は、桃山高校の校舎新築に伴って実施するもので、伏見城の大名屋敷に関連する調査成果が見込まれている。このほか、木津高校の校舎改築に伴う燈籠寺遺跡の調査と、須知高校の体育館新築に伴う蒲生遺跡の調査が予定されている。燈籠寺遺跡では以前の調査で埴輪を伴う小型の方墳(内田山古墳群)の周濠が確認されており、古墳関係の調査成果に期待が寄せられている。蒲生遺跡は弥生後期の集落遺跡であるが、今回の調査予定地は遺跡の中心部から外れている可能性が高いため試掘を先行して行い、遺構・遺物の出土状況に応じて調査規模を拡大する予定である。

13 中海道遺跡の発掘調査は、府道の拡幅工事に伴い、平成元年度に引きつづき実施するものである。弥生後期末、古墳中期、奈良～中世の各時代の遺構・遺物が高い密度で検出されるものと思われる。平成元年度調査では、初期須恵器の好資料が見いだされている。

14 長岡京跡ほかの発掘調査は、名神高速道路の拡幅工事に伴って昭和63年度以降継続的に実施している調査である。京都市伏見区から向日市、長岡京市を経て乙訓郡大山崎町に至る沿線約5kmの間に総面積約4,600m²に及ぶトレンチを設定する計画である。長岡京跡関係では、左京三条三坊、左京三条二坊、左京四条二坊、九条朱雀大路、右京九条一坊、右京九条三坊の各推定地において条坊関連遺構の検出を主目的とする調査を予定している。下層および上層遺跡関係では、向日市芝ヶ本遺跡、同鶏冠井清水遺跡、同鴨田遺跡、長岡京市雲宮遺跡、大山崎町百々遺跡、同算用田遺跡の各遺跡の調査を予定している。芝ヶ本遺跡は、古墳時代の集落遺跡で、昭和61年度に行われた発掘調査の際、碧玉製の石釧の断片が発見され注目を集めた遺跡である。鶏冠井清水遺跡は、縄文時代から古墳時代後期に至る各時代の遺構・遺物が検出されている複合集落遺跡である。鴨田遺跡は、弥生前期以降古墳後期に至る集落遺跡である。雲宮遺跡は、山城地方を代表する弥生前期の集落遺跡として、広く世に知られているが、平成元年度に引きつづき調査を行うもので、弥生前期以降古墳後期に至る各時代の遺構・遺物が検出されつつある。特に弥生前期の資料は質量ともに卓越している。百々遺跡は、長岡京の南側に接し、旧西国街道に貼りつくような位置に営まれた平安時代の遺跡である。掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑等の遺構に加えて土師器、須恵器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、銭貨などの遺物が大量に出土していることから、山城国府推定地の一つと考えられている重要な遺跡である。算用田遺跡は竪穴式住居跡ほかの遺構が確認されている古墳時代の集落遺跡である。以上のように長岡京はもとより各時代にわたる豊富な調査データが集約されるものと思われる。

15 長岡京跡の調査は、近畿財務局が計画している合同宿舎の建設に伴う調査で、昨年度に引きつづき、第2期工事に伴う緊急調査として同一敷地内で行うものである。長岡京左京三条一坊十二町・十三町推定地にあたり、昨年度調査と同様東一坊第二小路がトレンチ内を縦走し、その東西の宅地区画内では掘立柱建物跡等の遺構検出が見込まれている。

16 長岡宮跡の調査は、向日町競輪場の宿舎改築に伴う緊急調査である。向日丘陵の稜線部付近の高所に位置しており、長岡宮関係の遺構の存否は今のところ未確認である。

17 長岡京跡(府道下植野長岡京線)の調査は、府道の拡幅工事に伴うものである。長岡京右京七条一坊推定地にあたり、長岡京条坊に関係する調査成果に加えて、上層遺跡である勝竜寺城跡関係の調査成果についても大きな期待が寄せられている。

18 長岡京跡(技能開発センター)の調査は、雇用促進事業団が計画している技能開発センター建設に伴うものである。長岡京右京六条一坊推定地に相当し、条坊関係の調査成果が見込まれている。

19 内里八丁遺跡の調査は、建設省が計画している第二京阪道路の建設に伴い、昭和63年度から八幡市内里地区の沖積平野部で継続的に実施している調査である。今年度は、調査区の南端部で古墳時代の集落跡(下層遺構)の調査を行い、北半部では7～8世紀代の集落跡(上層遺構)の調査を行う予定である。また、防賀川を超えた北東部でも方形周溝遺構(方形周溝墓か建物の基壇状遺構と考えられる)を対象とする面的調査を計画している。

20 興戸遺跡の調査は国道307号線の新設に伴い、平成元年度から継続して実施している調査である。元年度の調査では、弥生中期以降中世に至る各時代の遺構を検出し、遺跡の北東端部がおさえられている。今年度は、近鉄線以西の調査区において試掘・本掘を行う予定である。

21 樋ノ口遺跡の調査は、京奈バイパス建設に伴うものである。山田川左岸の沖積地にある、80m四方程度の遺物散布地として『京都府遺跡地図』に記載されている周知の遺跡であるが、未調査のため詳しくはわからない。

22 瓦谷遺跡ほかの発掘は、住宅・都市整備公団が推進している関西文化学術研究都市建設に伴う緊急調査で、瓦谷遺跡のほか古墳2件(瓦谷古墳・西山塚古墳)の調査を行う予定である。瓦谷遺跡では、試掘結果にもとづき古墳～奈良時代の集落跡と古墳時代の木器多数を含む流路跡の面的調査を行う。瓦谷古墳は、埴輪、葺石を伴う径34m・高さ5.5mの中規模クラスの円墳である。前期後半に属するものと思われる。西山塚古墳は、台地上に営まれた径28m・高さ3mの中規模円墳である。2古墳ともに完掘し、古墳の全容を解明する予定である。

23 平山城館跡ほかは、平成元年度で現地調査を終了した近畿自動車道敦賀線(綾部市・

福知山市)関係遺跡の整理・報告事業を行うものである。今年度は平山城館跡ならびに平山東城館跡の調査報告書の刊行と野崎古墳群・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡・小谷古墳の各遺跡の整理作業を計画している。

24 千代川遺跡は、昨年度調査を実施した府道建設に伴う調査の整理と概報作成作業を行うものである。

25 長岡京跡は、昭和62年度から平成元年度までの3年間にわたって調査を進めてきた、外環状線街路改良工事に伴う長岡京右京西二坊大路周辺(右京第285・310・335次)での調査に関する整理と概報作成を行うものである。

以上に記した発掘調査事業のほか、展覧会等の普及啓発事業を計画している。当センターは、今年度末をもって設立10周年をむかえる関係上、例年実施している研修会・講演会・展覧会の開催、『京都府埋蔵文化財情報』の刊行などの普及啓発事業のうち、特に講演会と展覧会の規模を拡大し、10周年記念特別講演会・展覧会として実施する計画である。研修会は5回予定しており、うち1回はバスを利用して滋賀県湖東方面の臨地研修を計画している。特別講演会は、考古学・古代史から見た日本列島発掘10年の成果をテーマとして、考古学・古代史それぞれの第一線の研究者を講師に招聘して実施する計画である。特別展覧会は、当センターが設立された昭和56年以降の10年間において、京都府内各地で発見された主要遺物を一堂に集めて広く一般市民に公開するものである。名称は『京都・古代との出会い―京都府埋蔵文化財調査研究センター10周年記念特別展―』とし、京都府教育委員会・(財)京都文化財団との3者で共催する計画である。場所は京都文化博物館4階企画展示室を、展示期間は平成2年8月8日から9月2日までの25日間を予定している。共同研究事業は、昨年度に引きつづき「京都府の土師器・須恵器研究」をテーマに実施する。今年度は3年計画の最終年度にあたり、調査資料の集約・検討、印刷物の編集・刊行準備等の研究事業を計画している。機関誌『京都府埋蔵文化財情報』は、例年どおり年4号刊行する予定である。

印刷物の刊行計画は、発掘調査に伴う報告書・概報のほか、上記の特別展図録・『京都府埋蔵文化財情報』に加えて、今年度は設立10周年記念論文集『京都府埋蔵文化財論集』第2集の編集・刊行を計画している。

以上に記した当調査研究センターの平成2年度事業の実施にあたり、関係各位の御理解・御協力をお願い申し上げます。

(おくむら・せいいちろう=当センター調査第1課企画係長)

平成元年度京都府内埋蔵文化財の調査

小 山 雅 人

平成元年度も、京都府の各地で発掘調査が行われた。本稿では、特に顕著な成果があったものを時代順にまとめてみた。

(1)旧石器時代

長岡京市天神1丁目の十三遺跡で自然流路跡から2～3万年前のナイフ形石器2点(内1点は、国府型ナイフ)が出土した。この遺跡は従来縄文時代とされてきたが、旧石器時代まで遡る可能性が高くなった。なお、京都市左京区の岡崎動物園内の発掘調査で、21,000～26,000年前の平安神宮火山灰層直上の泥炭層上に大型の偶蹄類の動物の足跡が検出され、今後京都盆地においても遺構面として後期旧石器がとらえられる可能性が出てきた。

(2)縄文時代

長岡京市の友岡遺跡で、従来近畿では例の少なかった縄文中期の船元式の土器片が大量に出土した。今後この時期の基準資料になる可能性が高く、注目される。また、向日市の石田遺跡と中海道遺跡から、晩期の石刀が各1点出土した。

(3)弥生時代

丹後では、2例の後期遺跡が挙げられる。大宮町のアバタ遺跡から、府内では最古クラス(後期前半)の木庖丁や桶形容器が出土し、弥栄町の太田4号墳の調査では、6世紀中頃の古墳の下層に弥生末期の台状墓を検出し、土器埋納坑から台付壺などが出土した。北丹波の福知山市の興遺跡の調査では、中期末の集落を取り巻く環濠が確認された。珍しい遺物として木製のかんざしがあり、中期後半の土壙墓の副葬品と見られる。

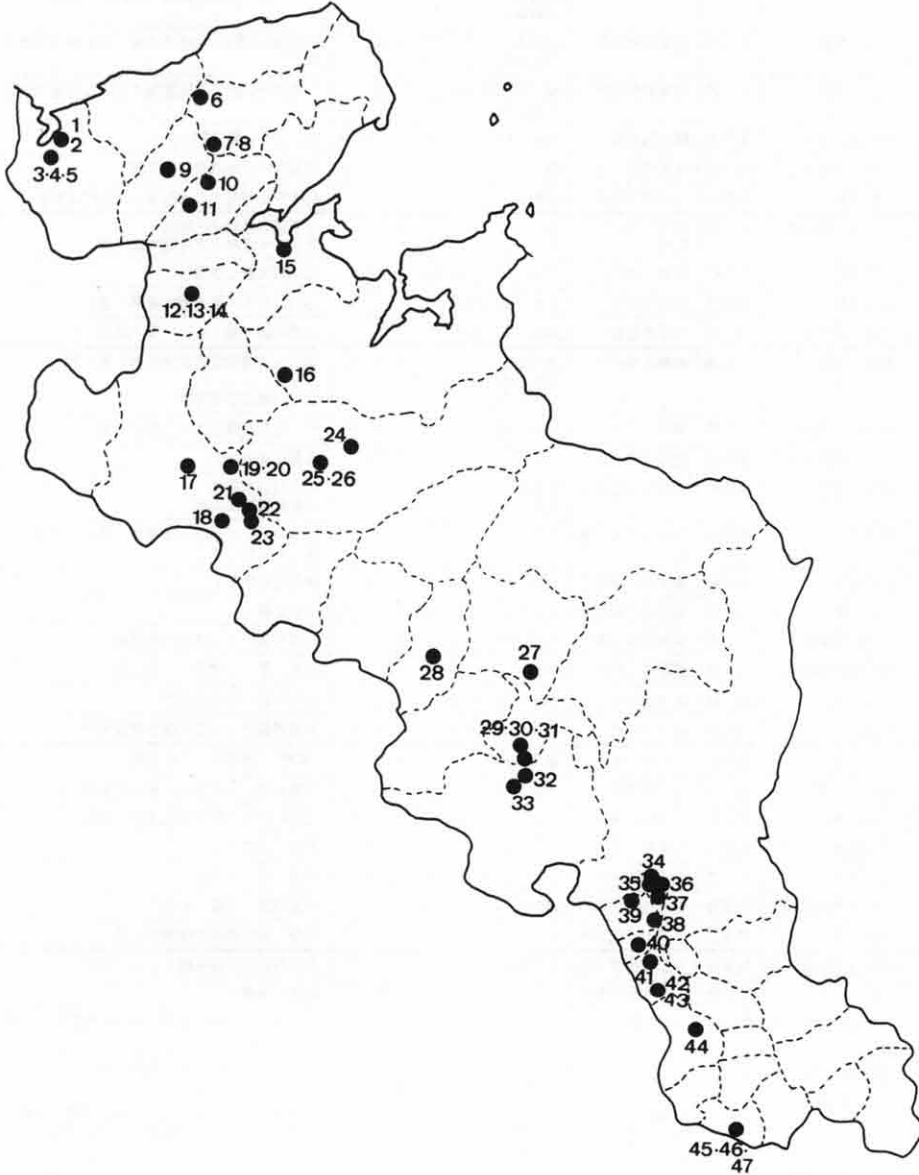
北山城では、名神自動車道拡幅工事に伴う発掘調査で、長岡京市の雲宮遺跡の弥生時代前期の環濠が初めて確認され、多量の土器が出土した。この調査は次年度にも続けられる予定で、成果が期待される。向日市の鶏冠井遺跡では、前期・中期の土器が土坑や柱穴などから多量に出土している。向日市の鶏冠井清水遺跡では中期の溝から石器や土器が多量に出土した。京都市右京区の西京極遺跡では、この遺跡で初めて弥生時代中・後期の方形

付表 京都府埋蔵文化財調査研究センター
平成元年度 発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	日光寺遺跡第2次	集落跡	久美浜町浦明	森島康雄	元5.9～10.6	平安期大型掘立柱建物跡 鎌倉期墓
2	コクバラノ遺跡	散布地	久美浜町甲山	森島康雄	元10.4～11.29	顕著な遺構なし
3	長良遺跡	散布地	久美浜町浦明	森島康雄	元7.6～8.29	奈良期掘立柱建物跡・欄列
4	川向1号墳	古墳	久美浜町大井	岩松 保 森島康雄	元4.12～7.20	6世紀後半の横穴式石室
5	山形古墓	古墓	久美浜町大井	岩松 保	元7.17～8.18	鎌倉/桃山期墳墓群
6	遠所遺跡群	生産跡	弥栄町木橋	増田孝彦 岡崎研一 石崎善久	元4.11～3.3	古墳～奈良期住居跡・製鉄炉・炭窯 土器・ミニチュア土器・銅鏝・紡錘車・叩き石
7	太田古墳群	古墳	弥栄町和田野	増田孝彦 石崎善久	元8.17～10.20	4号墳(円墳)・主体部3基 弥生時代土壇5基
8	下後古墳群	古墳	弥栄町和田野	増田孝彦 石崎善久	元8.17～10.20	1号墳(円墳)・土師器碗1点 5号墳(円墳)
9	古鞍遺跡第4次	集落跡	峰山町古殿	岩松 保	元8.8～10.12	弥生末～古墳前期の溝
10	阿姿田窯跡群	窯跡	大宮町善王寺	森 正	元8.7～2.1.24	奈良時代後半須恵器窯6基
11	上野遺跡	集落跡	大宮町上常吉	岡崎研一	元7.5～9.14	奈良平安期竪穴式住居跡・掘立柱建物跡
12	温江遺跡第2次	集落跡	加悦町温江・加悦他	森 正	元5.8～7.29	古墳後期竪穴式住居跡 奈良～平安期掘立柱建物跡・溝
13	井前遺跡	散布地	加悦町後野	岩松 保	元11.13～12.22	(試掘)顕著な遺構なし
14	桜内遺跡	散布地	加悦町金屋	岩松 保	元11.13～2.2.22	(試掘)弥生～平安時代遺構・遺物
15	宮津城跡第6次	城跡	宮津市鶴賀	鍋田 勇	元9.5～10.21	宮津城跡内堀・石垣・溝・路面
16	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市桑飼上	細川康晴 森島康雄 石崎善久	元4.18～2.2.27	弥生～古墳期竪穴式住居跡7基・管玉・ガラス小玉 奈良期掘立柱建物跡
17	高田山古墳群	古墳	福知山市中	小池 寛	元10.18～2.1.12	中・後期古墳2基・主体部3基
18	土師南遺跡第2次	集落跡	福知山市土師	引原茂治	元8.21～9.12	顕著な遺構なし
19	観音寺遺跡	集落跡	福知山市観音寺	引原茂治 黒坪一樹	元4.20～9.5	弥生期自然流路 鎌倉期建物跡・溝
20	興遺跡	集落跡	福知山市興・観音寺	田代 弘	元4.20～9.5	弥生中期後半環濠・土壇群・柱穴 土器・石器・木製かんざし
21	西山館跡	城館跡	福知山市観音寺	引原茂治	元5.19～6.14	顕著な遺構なし
22	小谷古墳	古墳	福知山市観音寺	引原茂治	2.2.16～2.3.3	弥生土器
23	マクモ古墳群	古墳	福知山市石原	竹原一彦	元4.12～6.13	古墳2基、2号墳から龍虎鏡
24	奥大石古墳群	古墳	綾部市上杉町	小池 寛	元5.9～8.4	方墳3基、2号墳から蛇行刻
25	仏南寺城跡	城跡	綾部市里町	黒坪一樹	元12.12～2.3.3	弥生土器・古式土師器
26	里遺跡	散布地	綾部市里町	田代 弘	元10.17～2.3.3	古墳周溝跡・奈良/鎌倉期建物跡
27	天若遺跡	散布地	日吉町天若	鍋田 勇	元12.8～2.2.23	(試掘)古墳期竪穴式住居跡
28	塩谷古墳群	古墳	丹波町曾根	伊野近富	元5.22～9.7	円墳8基、5号墳から巫女形埴輪
29	八木嶋遺跡	散布地	八木町八木嶋	鶴島三寿	元12.11～2.3.6	(試掘)弥生～鎌倉時代遺構・遺物
30	小谷遺跡	集落跡	八木町八木	小池 寛	2.1.10～2.2.9	顕著な遺構なし
31	小谷古墳	古墳	八木町八木	小池 寛	2.1.10～2.2.27	円墳・横穴式石室
32	千代川遺跡第15次	集落跡	亀岡市千代川町	鶴島三寿	元4.19～8.29	平安期溝 木簡 石帯
33	千代川遺跡第16次	集落跡	亀岡市千代川町	竹原一彦	元7.18～2.2.27	奈良～室町期掘立柱建物跡群
34	中海道遺跡第17次	集落跡	向日市物集女町	中川和哉	元11.20～2.2.16	古墳期竪穴式住居跡・古式須恵器
35	長岡宮跡第228次	都城跡	向日市寺戸町	石尾政信	元7.3～7.26	顕著な遺構なし
36	長岡京跡左京第222次	都城跡	向日市森本町	中川和哉 石尾政信	元6.12～7.28	東二坊第一小路西側溝 掘立柱建物跡 土馬
37	長岡京跡左京第226次	都城跡	向日市上植野町	三好博喜	元7.25～11.22	東一坊第二小路・掘立柱建物跡
38	長岡京跡左京第216次	都城跡	京都市伏見区 長岡京市神足～ 勝竜寺	竹井治雄 戸原和人 三好博喜 中川和哉	元4.4～2.3.9	二条第二小路側溝 五条大路・六条第一小路・東二坊第一小路； 古墳期溝；弥生前期環濠・中期住居跡
39	長岡京跡右京第335次	都城跡	長岡京市今里・ 井ノ内	石尾政信 引原茂治	元8.3～2.2.27	西二坊大路側溝 木簡 緑釉・灰釉陶器他 洪水跡

40	百々遺跡	集落跡	大山崎町円明寺	三好博喜	2.1.8~2.3.8	(試掘)平安期 溝・建物跡
41	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市八幡	竹井治雄	元 5.17~9.12	古墳前期竪穴式住居跡・土壇 噴砂
42	内里八丁遺跡	散布地	八幡市内里	荒川 史	元 5.12~2.2.27	飛鳥・奈良期竪穴式住居跡・建物跡
43	新田遺跡	散布地	八幡市内里	荒川 史	元 7.18~9.22	顕著な遺構なし
44	興戸遺跡	集落跡	田辺町興戸	伊野近富	元 11.9~2.2.27	弥生土器・平安期掘立柱建物跡
45	上人ヶ平遺跡	生産跡	木津町市坂	石井清司 伊賀高弘	元 4.10~2.3.9	奈良期掘立柱建物跡・土壇・井戸・平城宮式 軒瓦・瓦・土器・銭貨
46	瓦谷遺跡	散布地	木津町市坂	石井清司	元 4.10~2.2.26	顕著な遺構なし 埴輪片
47	瀬後谷遺跡	窯 跡	木津町市坂	伊賀高弘	元 8.5~11.27	顕著な遺構なし 土器片

参考文献：『京都府埋蔵文化財情報』第33号(Nos. 4.21.23)；同第34号(Nos. 1.11.12.18.19.20.24.32.35.36)；同第35号(Nos. 3.5.7.8.9.10.15.17.28.37.41)；同第36号(Nos. 10.19.20.26.27.29.33.34.42.44.45)



平成元年度 発掘調査遺跡

竪穴式住居跡 5 棟の出土をみた。このほか、京都市の久世遺跡や長岡京市の神足遺跡でも弥生時代の遺構・遺物が調査された。

南山城においても、山城町の涌出宮遺跡で多量の弥生土器を伴って環濠と竪穴式住居跡が 2 基検出され、弥生時代中期の集落が確認された。

(4)古墳時代

丹後では古墳時代前半期の 2 件の調査が注目される。弥栄町の太田南 2 号墳(前期)から、鉄製品や土器類とともに画文帯環状乳神獸鏡(後漢時代)が 1 面出土した。この鏡の鈕には、2 匹の竜が向かい合う浮き彫りが施され、極めて珍しい例である。一方、加悦町の作山古墳群では、造出し付円墳の 1 号墳・円墳の 2 号墳の墳丘裾部で木棺・埴輪棺・土壙墓など周辺埋葬施設が 26 基検出された。1 号墳(4 世紀末)の造出し部分に割竹形木棺の主体部(4 世紀後半)があったことから、これを 1 号墳以前に築かれた方墳(5 号墳)として発表されたが、異説も出ており、決着は見えていない。

また、弥栄町のオテジ谷古墳(中期初頭)の割竹形木棺から出土した素環頭大刀には、目釘が使われており、最古の一例として、注目される。丹後町の鼻下り古墳は外護列石を巡らせた直径 20m の円墳で、6 世紀後半の横穴式石室を主体部としていた。久美浜町の経塚古墳は、かなりの破壊を蒙りながらも、7 世紀初頭から前半にかけて多量の須恵器が出土した横穴式石室墳で、また、野田川町の小森山 2 号墳は古墳時代後期後半(7 世紀)の羨道のない小型の横穴式石室をもつ古墳であった。生産遺跡として、弥栄町で行われた遠所遺跡の成果は、特筆できる。製鉄炉・炭焼き窯・住居跡などが広範囲に広がり、6～8 世紀の年代が与えられている。この調査は、次年度にも続けられることになっており、年代等、より詳細な成果が期待される。

丹波においてもユニークな古墳の発掘が相次いだ。福知山市のヌクモ古墳群(中期中頃)では、2 基の方墳の内、2 号墳主体部から多量の玉類とともに龍虎鏡が出土し、一方、綾部市の奥大石古墳群(中期前半)の 3 基の方墳のうち 2 号墳から、府内では初の例となった蛇行剣が出土した。また、福知山市の高田山古墳群は、2 基の方墳からなる 5 世紀前半の古墳群として知られていたが、今年度の調査で、新たに 5 世紀後半の方墳と 6 世紀初頭の円墳が各 1 基検出された。福知山市では他に後期の群集墳下山古墳群が調査された。

丹波町の円墳 12 基からなる塩谷古墳群の 5 号墳(後期初頭)から、巫女形埴輪が出土した。2 体のうち 1 体は、高さ 71.5cm の完形に復原でき、服装やその文様なども写実的で、全国的にも貴重な資料となった。

集落遺跡として、試掘調査された日吉町の天若遺跡があり、次年度以後の成果が期待される。

北山城では、著名な古墳がいくつか部分的に調査された。京都市西京区の国指定史跡の前方後円墳、天皇の杜古墳の時期は確定していなかったが、墳丘部の調査で出土した埴輪から前期後半とされた。また、周辺の水田の形から予想されていた周濠の存在は確認されなかった。一方、長岡京市の長法寺南原古墳の前方部の小竪穴式石室は、東枕であったことが確認された。

後期の古墳の調査として以下のものがある。京都市西京区南春日町で、後期の古墳が新たに確認された。直径約18mの円墳で、両袖式の横穴式石室内から保存状態のよい副葬品が出土した。長岡京市の円墳とされていた今里大塚古墳(後期、径45m)は、墳丘周辺の調査によって前方後円墳であった可能性が出てきた。また、向日市の物集女車塚古墳(後期)では外装が貧弱とされていた南面においても、復原整備調査で葺石や埴輪列が検出された。また、前方部からも埴輪片が出土した。

集落遺跡として、向日市の中海道遺跡の竪穴式住居跡から出土した須恵器は、最古段階(陶器TK73型式)のもので、土師器と共伴しており、古墳時代中期の土器編年に重要な資料となった。他に、馬場遺跡・鶏冠井清水遺跡の調査がある。

南山城では、まず八幡市の方墳ヒル塚古墳の発掘調査が挙げられる。一辺52m・高さ7.5m、三段築成で葺石・埴輪を備え、幅14mの周濠を持ち、方墳としては、府内最大級である。埋葬施設は2基の粘土槨と円筒棺1基からなる。第1主体部は、盗掘にあっていたが、周辺から画像鏡と鉄製武器類が出土した。特に、粘土床側面出土の渦巻き状装飾付き鉄剣(全長38.8cm)は、前例のない遺物として注目を集めた。第2主体部からは、方格矩鏡と鉄剣、周辺から短剣・工具類が出土した。

整美な蓋形埴輪で知られる宇治市の庵寺山古墳(4世紀末)の調査で、多量の埴輪片が出土したが、復原された4点の家形埴輪が衆目を集めた。また、同市の前方後円墳、二子塚古墳(全長110m、6世紀前半)で、周濠堤が調査された。精華町の畑ノ前東遺跡の調査では、新たに7基の古墳が検出されたが、周濠から馬の装飾付き提瓶が出土し、注目された。

過去の調査の出土遺物整理による新しい発見としては、福知山市の奉安塚古墳(後期)出土の鉄製の握りばさみと、向日市の芝ヶ本遺跡(前期)のガラス勾玉の鋳型が話題を呼んだ。

(5) 飛鳥・奈良時代

丹後大宮町のアバタ窯跡では、奈良時代後半の須恵器窯が8基調査された。同町の上野遺跡では、奈良時代後半から平安時代前期の柵が検出された。また、加悦町の温江遺跡で、奈良時代の溝などが検出された。

丹波では、綾部市の青野南遺跡で数棟の竪穴式住居跡が検出され、青野・綾中地区にお

ける6世紀から8世紀の一大集落に、新たな遺構が加えられた。

北山城では、長岡京市の井ノ内遺跡で7世紀末の土師器・須恵器がまとまって出土した。隣接する今里遺跡とともに乙訓寺建立とかかわりのあった集落と見られる。

長岡京市の井ノ内遺跡では、昭和62年度から発掘調査が行われてきたが、長岡京の大路の路面に位置する掘立柱建物跡や石組み溝をもつ井戸跡は、各種土器や檜扇などとともに出土した木簡や墨書土器に書かれた銘文の文献学的分析によって、長岡京期以前の奈良時代(8世紀前半)の遺構であることが確認され、この地が乙訓郡に存在した「園」跡であると推定された。考古学と文献史学との協力のひとつの新しい成果として特筆できよう。

南山城では、木津町の上人ヶ平遺跡が注目される。平行する4棟の大型建物(南北に廂付きの2間×9間)を含む掘立柱建物跡3群・溝・井戸などからなる大規模な遺構群が検出された。遺跡のほぼ全域に大量の瓦片や土器が散布し、隣接して市坂瓦窯が存在することなどから、前代の古墳の周濠なども再利用して、粘土の採掘から土打ち・成形・乾燥など、窯入れ直前までの作業を行った工房跡と考えられる。この遺跡は、出土する瓦が市坂瓦窯・平城宮大膳職のそれと共通することから、聖武朝の平城京遷都後の宮内の官衙地区大修理の際の瓦工場と考えられている。

八幡市の内里八丁遺跡では、竪穴式住居跡1棟と掘立柱建物跡4棟を検出した。出土した土器から7世紀中頃から8世紀にかけての集落であることを確認した。出土遺物の中には石帯が1点見られ、官人の居住も考えられる。精華町の畑ノ前東遺跡で、奈良時代の4棟の掘立柱建物跡が検出された。昭和60年度に西方70mの地点で発掘された井戸跡とともに豪族(稲峰間氏か)の居館跡と推定されている。

加茂町の恭仁宮跡の調査では、朝集殿院の東南隅の柱穴20個を確認し、朝集殿院の規模を東西138m・南北78mと確定した。また、南限と推定される位置の3条の溝は、宮の大垣との関連が注目される。

(6)長岡京時代

長岡京城の3市1町では、この年も多くの発掘調査が行われたが、特に宮内で2件の重要な成果があった。向日市の長岡宮跡の調査では、礎石建物跡2棟が検出されたが、「主税」・「主計」などの墨書土器や周辺の調査結果から長岡宮の大蔵省跡と推定された。一方、向日市鶏冠井町の長岡宮内裏地区の調査で、平安宮の登華殿と弘徽殿に相当すると見られる掘立柱建物跡が検出された。従来の周辺での調査結果と合わせると、長岡宮の内裏の構造は平安宮のそれとかなり近かったようである。

左京城では、以下の調査が挙げられる。一条二坊七町で大型建物跡が墨書土器・転用硯

などとともに見出され、貴族の邸宅跡と見られる。三条一坊一町(向日市鶏冠井町極楽寺)では、柵列・大型建物跡が見出され、地鎮用の土器が出土し、また、井戸から斎串とともにガラス小玉が出土した。三条一坊十三町の発掘調査では、東一坊第二小路の両側溝と2棟の掘立柱建物跡が見出された。特筆されるのは、三条二坊二町の発掘調査で、東二坊大路の側溝から多種多様の遺物が出土した。長岡京で初出となった鉄製の車軸受のほか、土馬・人形・銅鈴・横櫛などの祭祀用具、木簡・墨書土器・瓦・海老錠部分・刀子・紡錘車・曲物・箸などの遺物は、この一体が官庁街であったことを如実に示している。また、長岡京市馬場の五条一坊九・十町での調査において、東一坊坊間大路と五条第一小路の辻の東部分が見出された。五条第一小路は初の確認例である。六条一坊では、完形大型漆器・銅鈴・小銅鏡が出土した。

右京域では、長岡京市井ノ内の右京二条二坊十四町の調査で、西二坊大路の東側溝の洪水で破壊を受けた痕跡が見出され、右京域での洪水跡の初の確認例となった。一方、三条二坊五町でも三条第二小路南側溝から、漆塗りの大鉢が出土し注目された。

(7)平安時代

丹波の亀岡市の篠遺跡は、平安京に須恵器を供給した篠窯跡群に関連する集落として注目される。同市の千代川遺跡では、緑釉陶器・墨書土器のほかに石帯が新たに2点出土し、丹波国府跡である可能性がさらに高くなった。

平安京では、京都市右京区の右京六条三坊四町では中・下級役人の邸宅跡と考えられる5棟の建物跡が見出された。また、京都市下京区の左京五条二坊十六町の藤原資長邸跡の発掘調査で12世紀後半に火災に遭った建物跡が見出され、鴨長明の『方丈記』などの文献に記された「太郎焼亡」が考古学的に初めて確認された。

一方、京都市下京区で見出された皇嘉門大路の側溝は、8世紀後半に造られ、数回の修復が行われた後、10世紀には廃絶したことが窺われ、また、中京区の右京三条二坊十一・十四町の調査では、野寺小路が12世紀には川になっていたことが確認され、いずれも右京域の大路・小路の荒廃を物語る好資料となった。

平安時代の苑池遺構が相次いで見出された。京内では、京都市中京区の高陽院跡で確認された地業跡の下層から、池跡が見出された。池底の土器等(11世紀)から見て、藤原頼通の高陽院創建時の苑池とみられる。京外でも、右京区の大覚寺・大沢池周辺の調査では、離宮嵯峨院の平安初期の遺水の全体像が確認された。同じく嵯峨では、平安時代前期の池跡が見出され、上流貴族の山荘の庭園の一面と見られる。また、伏見区の鳥羽離宮跡では、東殿の苑池と御堂に飾られていたと考えられる木製の雲形彫刻などが出土し、同区の伏見

奉行所下層から検出された池から11世紀後半～12世紀の貿易陶磁を含む土器が出土し、伏見山荘(伏見殿)が藤原氏一族の山荘の苑池跡と推定された。一方、宇治市の市街地で平安時代後期の井戸跡が検出された。当地は平等院を中心とした平安貴族の別荘地で、井戸から多数出土した土器類は、宴会等に使われたものと見られる。

寺院関係でもいくつかの成果があった。京都市南区の東寺(教王護国寺)の重要文化財・慶賀門(鎌倉初期)の礎石は、再利用されており、門は再建されたものと判明したが、平安初期の遺構が確認されなかったことから、創建当初にはこの門はなかったと見られている。左京区岡崎では、尊勝寺の九体阿弥陀堂の礎石建物跡が発掘された。また、京都市左京区の幡枝で調査された南ノ庄窯跡は、平安後期に京内の寺院に瓦を供給されていたと見られている。長岡京市の伊賀遺跡では、平安時代前期の建物跡が検出され、「伊賀寺」との関連が考えられる。また、同市の勝竜寺跡で3棟の掘立柱建物跡が発掘され、平安時代(10世紀前半)の青竜寺(後の勝竜寺)の僧坊跡と見られる。

一方、大山崎町竜光の山城国府跡の調査で検出された平安時代の幅12mの道路跡は、古代山陽道と推定された。平安時代初期の緑釉の火舎と羽釜がセットで出土し、ほぼ完形に復原され、平安時代のものとしては府内で初出土の八稜鏡とともに貴重な資料となった。

南山城の田辺町の興戸遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡群に伴って、硯や緑釉陶器を含む多数の土器が出土し、周辺にあったと考えられる官衙を支える役人の集落と見られているが、本格調査は次年度に行われる。

(8) 中 世

丹後の舞鶴市の久田美遺跡から出土した鎌倉末期の呪符木簡は、7つの目を描いた全国でも初めての例である。また、丹波の亀岡市の千代川遺跡第16次調査では、鎌倉時代を中心に奈良時代から室町時代にわたる数時期の建物跡群が検出された。

京都市内で室町時代の重要な成果が見られた。前年度に北山殿跡とみられる遺構を検出していた鹿苑寺(金閣寺)境内の調査で、修羅が2基出土した。共伴した土師器から、14世紀末の足利義満の北山殿の造営に使用されたと見られる。一方、京都市上京区の室町殿「花の御所」跡の発掘調査では、景石・集石・築山跡などの庭園遺構とその敷地の南限を示すと考えられる薬研堀が確認された。遺構は15世紀後半のもので、応仁・文明の乱後に廃絶している。

他に、大山崎町の山城国府跡の調査で、備前焼きの甕を埋置した遺構数基が検出された。中世の大山崎油座の倉庫跡と見られる。

(9)近 世

桃山時代に関しては、京都市を中心にいくつかの成果があった。中京区の町屋跡の発掘調査で、安土・桃山期から江戸初期にかけての膨大な量の陶磁器が出土した。一方、伏見区の羽束師では室町末期から江戸中期の200年間にわたる墳墓群と数時期に及ぶ火葬跡が出土し、在地の領主クラスの墓域と推定されている。

八幡市の木津川河床遺跡では古墳時代初頭の竪穴式住居跡群などが検出されたが、近年各地でみつまっている大地震に伴う噴砂の良好な一例として、伏見城・東寺・天竜寺・大覚寺、そして方広寺の大仏まで倒壊した文禄13(1596)年の「慶長伏見大地震」の痕跡が注目をあつめた。一方、伏見城跡の発掘調査でも、外堀跡の南東斜面で噴砂跡が検出された。

江戸時代の調査では、次の2件があった。京都市伏見区西奉行町で、伏見奉行所の石垣・石組み溝・通路・建物跡など江戸後期の遺構が多量の日常雑器とともに検出された。また、大山崎町の妙喜庵では、この寺院とは別の寺院遺構が検出され、「民家千軒、寺百軒」といわれた当時のようすが窺われる。

なお、付表と付図に平成元年度の当調査研究センターの発掘調査を集約した。本文と重複するところもあるが、併せて参照されたい。

(注1)

阿婆田窯跡群の発掘調査

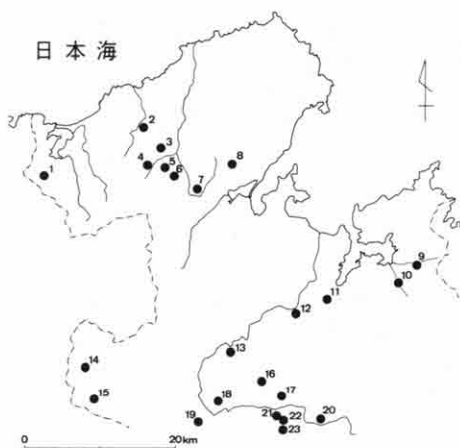
森 正

1. はじめに

今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画推進している「丹後国営農地開発事業」の大野団地造成に伴い、同局の依頼を受けて実施した。

阿婆田窯跡群は、中郡大宮町字善王寺に所在する須恵器窯跡群である。その分布と立地を見ると、善王寺集落から西に深くのびる谷筋に3支群十数基が存在し、谷の入口から奥に向い、A～C支群としている。A支群では、窯体の残欠が1基確認できるが、本来何基で構成されているものか不明である。B支群は、A支群から西側約140m谷奥に位置し、現在の阿婆田池東側の里道によって削られた斜面に、4基の窯体断面が露出している。C支群は、更に西側200m谷奥に位置する。各支群とも丘陵の東斜面に位置している。これらは、分布調査によってすでに確認されており、表採遺物から阿婆田窯跡群の操業時期は、8世紀代であることが判明している。^(注2)

このうち今回は、造成に係るC支群の発掘調査を行った。ここでは、調査の概要とともに、2号窯から出土した特徴的な遺物である環状平瓶及び、ヘラ書き文字のある土器についての報告を行う。



第1図 京都府北部須恵器窯跡分布図
阿婆田窯跡は6, その他は注3参照

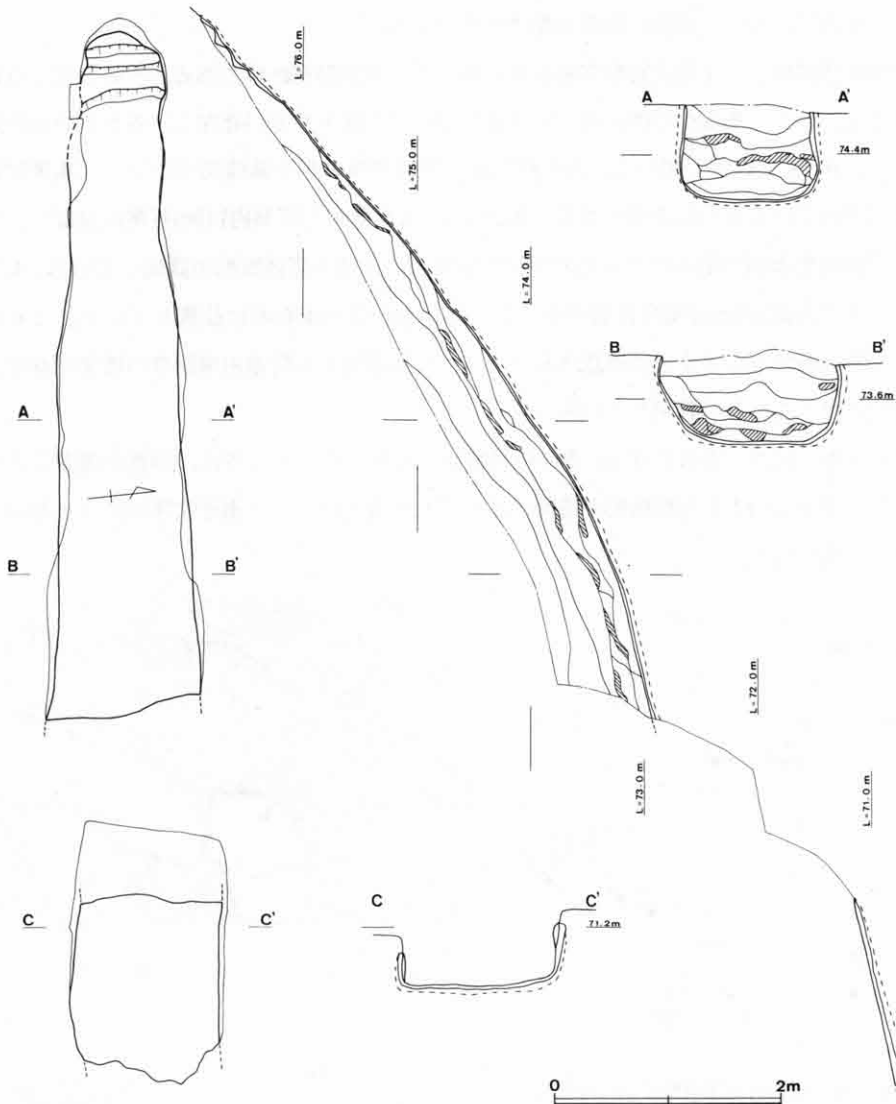


第2図 阿婆田窯跡群分布図

2. 調査概要

C支群は当初、崖面に3基の窯体断面が露出した状況であった。これをもとに拡張調査を行ったところ、極めて近接した状況で6基の窯体を検出した。

今回検出した6基の窯体は、いずれもその前面は崩れ落ちており、焚き口部まで残存しているものはなかった。灰原についてもすでに流出している。斜面前面の谷部分において、



第3図 阿婆田2号窯跡実測図

C支群に伴うものと考えられる遺物包含層が認められたが、粗砂層を主体とする流土であり、灰原という状況ではない。

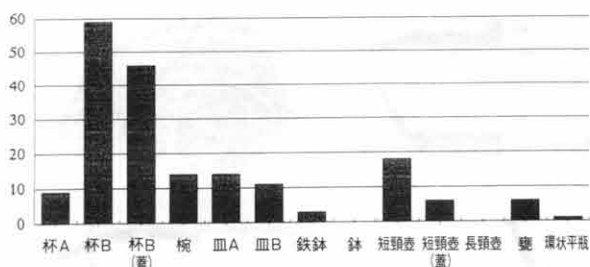
各窯体は比較的急斜面に造られており、焼成部での傾斜角は2号窯で35°を測り、最も緩やかな1号窯でも30°を測る。各窯とも、花崗岩風化土の地山を掘りくぼめて窯体を構築する半地下式の構造である。また、3号窯と6号窯には、燃焼部と焼成部の境付近に、いわゆる舟底状土坑を設けている。

各窯の操業時期については出土土器から見て、3号窯が平城Ⅱに併行する時期、4～6号窯が平城Ⅲに併行し、1・2号窯が平城Ⅳに併行するものと考えている。

(2号窯の概要)

今回報告する土器の出土した2号窯は、C支群北端に位置する1号窯の南約2.5mの地点にある。調査前には、崖面から窯体燃焼部の断面が露出していた。掘削の結果、窯体は上段に燃焼部の一部から煙道部までが残存しており、天井部は細片となって窯体内に陥没した状況であった。また、崖面から2m程度下方に、燃焼部の床面がずり落ちた状況で検出でき、結果的には焚き口付近までが残存していることとなった。この下方の床面につい

阿婆田2号窯出土須恵器器種構成表(個体数)



阿婆田2号窯窯体内土器出土状況(東から)



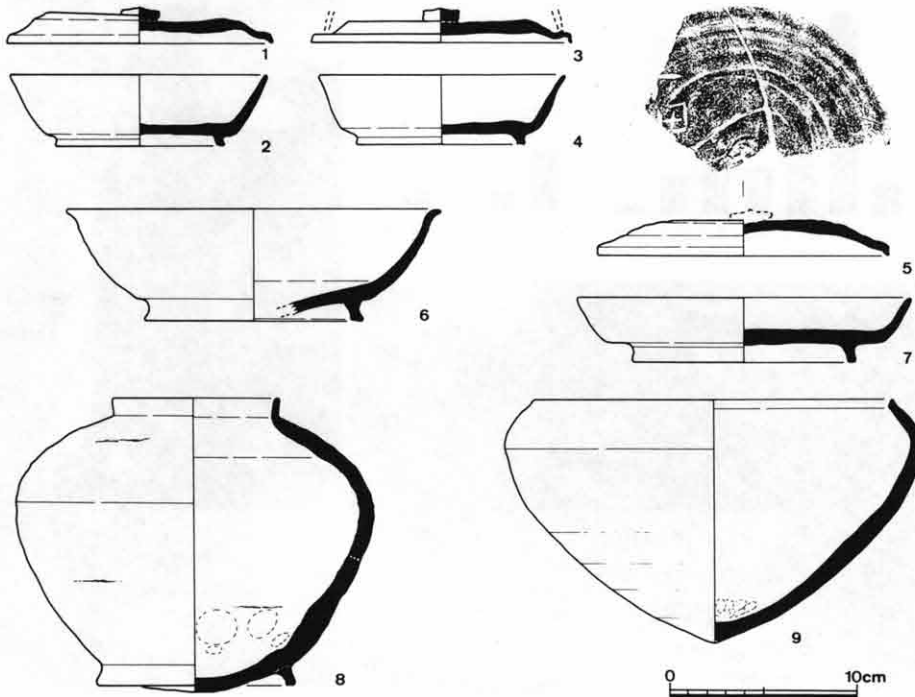
阿婆田2号窯全景(東から)

ては、当初別の窯の存在も想定したが、床面遺物の接合関係があることから見ても、地震等の要因によってずり落ちたものと判断した。さらに、南に隣接して築かれた3号窯でも、同様な状況を確認したことから、首肯されるものである。窯体の構造は、半地下式無段の登り窯であるが、煙道部上方には幅5cm程度の段が3段分だけ設けられている。床面は一面であるが、壁面にはスサ入り粘土による部分的な補修の痕跡が認められる。

窯体内には、焼成部下方及び燃焼部床面上、さらに下方へずり落ちた床面上にも、最終操業に伴う土器が多数残存していた。総個体数は、201点におよび、器種毎の内訳は表1のとおりである。杯類が主体をなし、椀・皿のほか、壺類には薬壺形壺・長胴短頸壺、鉢には鉄鉢形鉢がある。当該時期の良好な資料のない当地域で、これらの土器の年代的位置付けを求めるのは難しいが、あえて平城宮編年に対応させるなら、平城Ⅳに併行するものであろう。今回報告する環状平瓶はこの一群の中にあり、下方床面からも破片が一点出土している。また、ヘラ書き文字をもつ杯蓋は、床面上方の窯体内流入土中から出土した。

3. 環状平瓶について(第5図)

本例の特徴は、体部が環状を呈する点にある。側面から見ると、肩部の鋭い平瓶である



第4図 阿婆田2号窯出土土器実測図

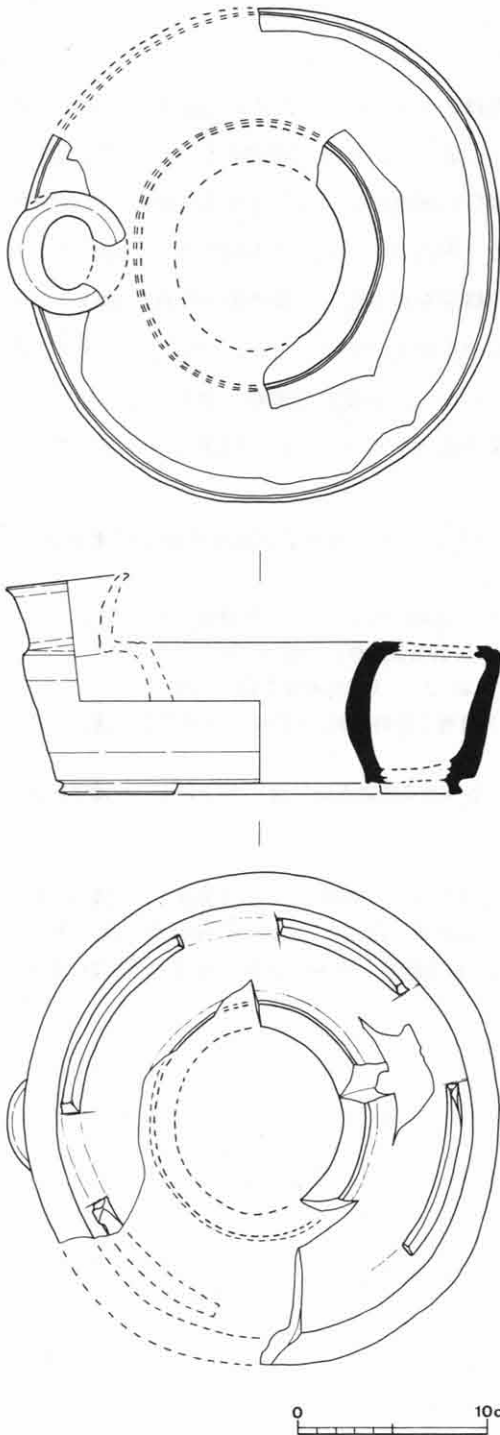
が、体部断面はやや歪んだ長方形を呈する。体部径は、やや歪んでおり、頸部の付く方向で26.0cm、これに直交する方向では、25.2cmを測る。各面は直線的で、内側の面のみやや膨らむ。頸部は細く、外反して短く開く口縁部をもつ。底部は平らで、輪状高台を貼り付ける。高台は、貼り付けた後に4か所を切り取っており、側面から見ると透かし様の効果を生んでいる。全体の1/2程度は、破片から復原できたが、体部上面の破片はなく、把手をもつものかどうかも不明である。しかし、通有の平瓶の把手は、想定できない。焼成は良好であり、色調は暗青灰色を呈する。

4. ヘラ描き土器について

(第4図-5)

笠形の天井部をもつ杯B蓋の破片である。2点の破片を接合できたが、完形にはならず、残存率は全体の1/3程度である。口縁部は、端部を下方へ屈曲させ、外側にはやや内湾した面をもつ。天井部のほぼ中央には、つまみを接合する際につけたと思われるキズがあり、本来はつまみを持っていたことがわかる。焼成は非常に甘く軟質であり、乳白色を呈する。

天井部に先端の鋭いヘラ状の工具によって、「□田」という文字が刻まれている。破片資料であるため、



第5図 環状平瓶実測図

一文字しか判読できない。

5. おわりに

今回は、昨年度行った阿婆田窯跡群の調査概要とともに、2号窯から出土した環状平瓶とヘラ書き文字のある土器の紹介を行った。前者については、同期のものとしては類例がなく、6世紀に出現する環状の体部をもつ提瓶の系譜を引くものとも考え難い。奈良時代の土器の形態としては異例であり、使用場所・用途等については不明であると言わざるを得ない。ただ、2号窯窯体内出土土器の器種構成を見ると、薬壺形壺や鉄鉢形鉢など役所・寺院等、ある程度供給先が限定できるものを含んでおり、これらと同列に扱うことが妥当かと考える。阿婆田窯跡の供給先を考える上で、示唆的な遺物であると言える。

また、現在行っている出土遺物の整理作業の進行を待って、他の問題についても考えていきたい。

(もり・ただし=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 これまで現地説明会、新聞発表等においては遺跡名称を『アバタ窯跡群』としていたが、今後は京都府遺跡地図に登録されている『阿婆田窯跡群』と統一する。

注2 杉原和雄他「裏陰遺跡発掘調査概報」第2章(2) 大宮町教育委員会 1979
杉原和雄「京都府北部の須恵器生産」(『丹後郷土資料館報』第2号 京都府立丹後郷土資料館) 1981
山田邦和「京都府下の須恵器窯」(『マムシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校地学術調査委員会) 1983

注3 第1図窯跡地名表

1.奥馬地窯 2.郷窯 3.吉原窯跡 4.青谷窯 5.大河原窯 6.アバタ窯跡 7.三坂谷窯跡
8.新宮窯跡 9.小倉窯 10.行永窯 11.城屋窯 12.シゲツ窯 13.尾頭窯 14.上町窯
15.末窯跡群 16.三坂窯 17.大谷窯 18.賀茂野窯 19.稲子谷窯 20.西原窯 21.東光
院窯 22.須恵器窯 23.安場窯

桑飼上遺跡の竪穴式住居跡

—平成元年度の調査から—

細川 康晴

1. はじめに

桑飼上遺跡は、京都府北部最大の河川である由良川の自然堤防上に位置する代表的な集落遺跡のひとつである。この調査は、由良川河川改修工事に伴うもので、建設省の依頼を受けて、昭和62年度の試掘調査の開始以来調査を継続している。平成元年度は、本調査(面的調査)の2年目にあたり、63年度調査地のの上流4,000m²について調査を行った。この結果、上層では掘立柱建物跡、下層では、竪穴式住居跡群(以下住居跡)を検出したので、ここでは、今年度調査の竪穴式住居跡を中心に、これまで、調査した住居跡について合わせて報告し、今回検出した住居跡の位置づけについて一定の見通しを立ててみたい。

2. 土器の変遷と住居の形

今回新たに検出した住居跡は、全部で6基である。分布密度は、比較的散漫で、重複関係にあるものは少ない。遺存状況は、完全に残っているものはむしろ少なく、残存壁高は18～28cm程度である。形状については、円形・隅丸方形・長方形の3種に大別できる。竪穴式住居跡の施設として、柱穴・周壁溝・特殊ピット・炉跡などがある。柱穴は、竪穴の形状が方形の場合は基本的に4本柱であると思われるが、確実に4本分検出できなかったものもある。以下に時期を追って、土器型式の変遷



第1図 遺跡所在地

と住居形の構造の変化について概述する。

第4図に、これまで検出した竪穴式住居跡と出土した土器の関係を一括した。また土器の整理が十分に進んでいないので、型式分類に基づく細かな検討には耐えないが、甕の器形の変遷を中心に、大別すれば5期に分けて考えることができる。

1期は、内傾する複合口縁に1～2条の擬凹線文を施す甕を主体とする段階。底部は平底。竪穴式住居跡12がこれにあたる。竪穴の平面形は、隅丸長方形で、周壁溝を巡らす。柱穴は、基本的に4本柱であるが、竪穴主軸とは同一とならない。

2期は、やや外開き気味に立ち上がる複合口縁に数条の擬凹線文を施す甕ないしは、無文の甕を主体にする段階。底部は、やや丸底に近い平底である。竪穴式住居跡14・17がこれにあたる。竪穴の平面形は、竪穴式住居跡14が円形、竪穴式住居跡17が方形である。竪穴式住居跡14は、直径10.5mを測る大型の住居で、埋土中からガラス小玉2点(淡青色・紺色)・碧玉製管玉1点の出土が目される。

3期は、単純「く」の字口縁の甕および、体部下半部にタタキ成形を施した甕が存在する。ほかに、台付きの鉢が共存している。竪穴式住居跡11(昭和62年度試掘調査)がこれにあたる。周壁溝を有するが、部分的にとぎれ完周しない。南辺に特殊ピットを持つ。

4期は、バラエティーに富んだ器種が存在する。広口壺・「5」の字状口縁と通称される複合口縁の壺、大型の複合口縁の甕などである。このほか、有孔鉢も存在する。竪穴式住居跡13がこれにあたる。竪穴の平面形は、長方形で、4本柱と思われるが、あまりしっかりした柱穴が見あたらず、周壁溝も持たない。

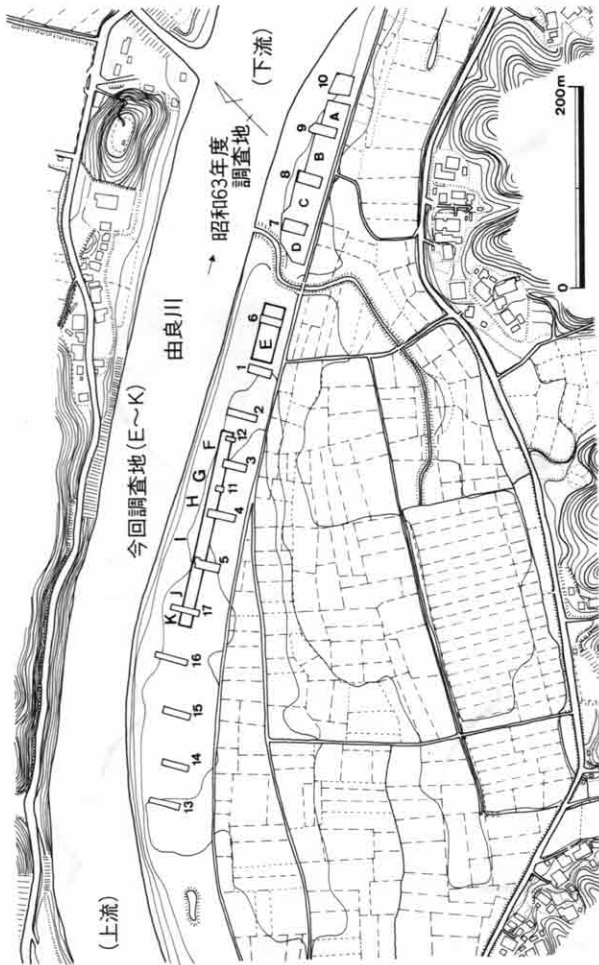
5期は、須恵器出現前後を一括した。各住居跡からの、小型丸底壺・甕の型式の変化か

付表 主要竪穴式住居跡一覧表

()は現存値

竪穴式住居跡番号	形	規模(m) *			出土遺物		時 期	備 考
		東西	南北	深さ	土器	玉類		
竪穴11	□	4.4	(4.0)	0.18	○		古墳時代前期	62年度試掘調査
竪穴12	□	4.4	(5.0)	0.27	○	ガラス玉	弥生時代後期	元年度発掘調査
竪穴13	□	3.2	(4.2)	0.19	○		古墳時代前期	元年度発掘調査
竪穴14	○	10.5	(6.0)	0.28	○	ガラス玉 管 玉	弥生時代後期	元年度発掘調査
竪穴15	□	3.2	?	0.11	○		古墳時代前期	元年度発掘調査
竪穴16	○	6.0	?	0.27	○		弥生時代後期	元年度発掘調査
竪穴17	□	4.2	(3.8)	0.25	○		弥生時代後期	元年度発掘調査

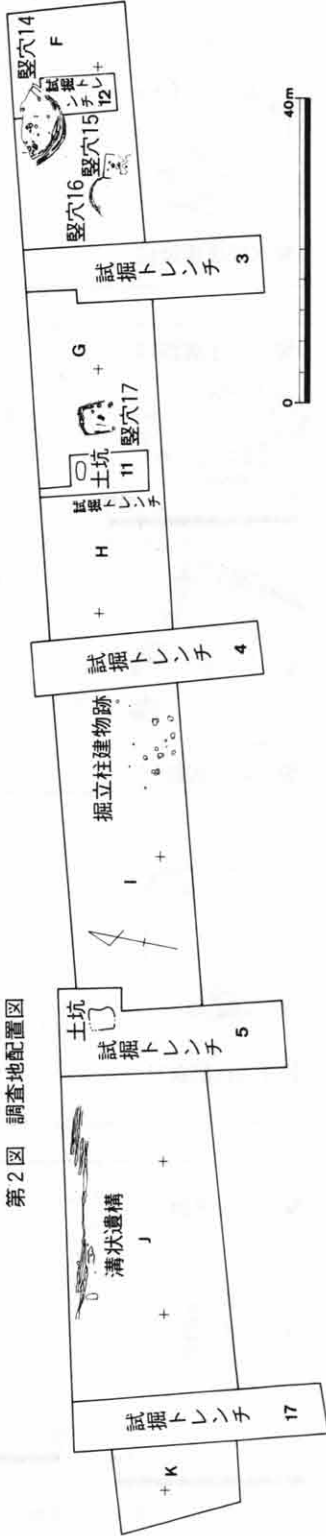
*□(方形)は一辺の長さ、○(円形)は直径、深さは残存高を表す。



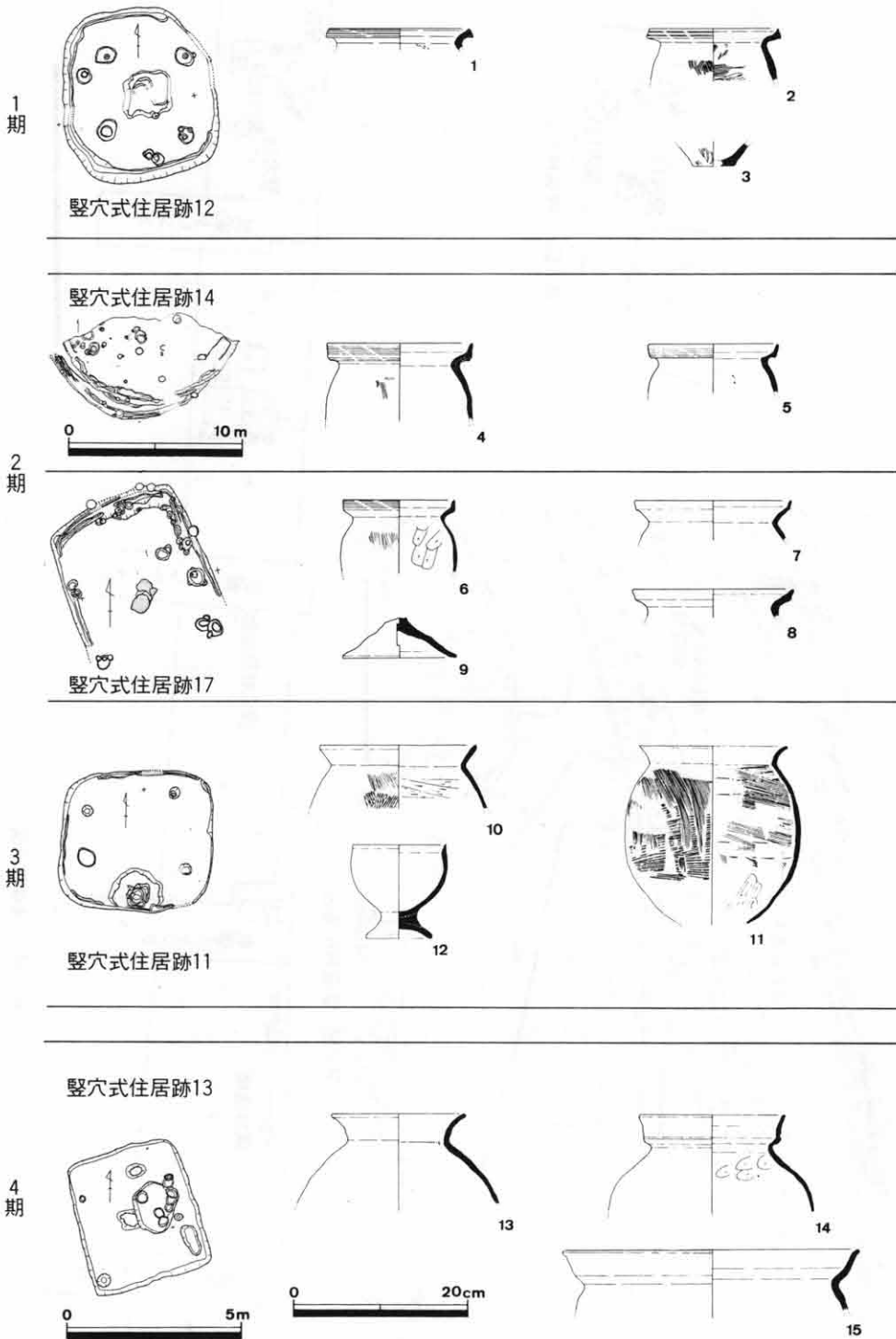
第2図 調査地配置図



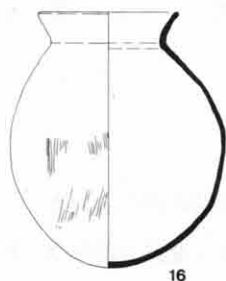
第3図-1 遺構検出図



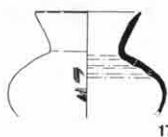
第3図-2 遺構検出図



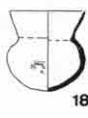
第4図 桑飼上遺跡の竪穴式住居跡と土器(今回調査)



16



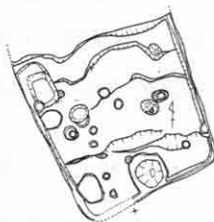
17



18



19



竪穴式住居跡 3



20



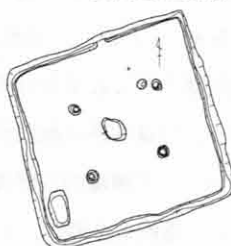
21



23

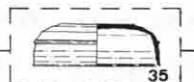


22

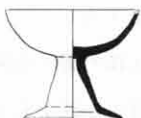


竪穴式住居跡 9

5
期



35



24



25

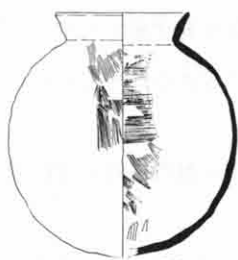


36



37

竪穴式住居跡 4



26



27



29



38



28



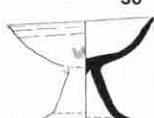
32



30



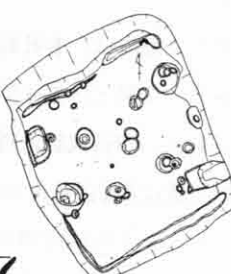
33



31



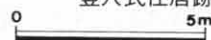
34



竪穴式住居跡 5



20cm



5m

(昭和63年度調査)

ら、さらに細分が可能である。竪穴の平面形はすべて方形で、支柱穴は4本柱で、周壁溝を巡らし、特殊ピットを持つものを基本とする。竪穴式住居跡3・4・5・9(昭和62・63年度調査)などがこれにあたる。

3. おわりに —各期の年代—

1～5期までは、型的に必ずしも連続せず、それぞれの型式間には空白がある。

さて、すでに公にされている隣接地域の編年の評価に照らせば、桑飼上遺跡の土器は、どのような位置づけになるのであろうか。最も近接する(下流約4km)志高遺跡の場合、畿内「第Ⅳ様式末から第Ⅴ様式後半に相当する時期」を3期に細分している(志高弥生Ⅶ期～Ⅹ期)。しかし、自然堤防上立地の集落遺跡の宿命と言うべきか、Ⅶ期(Ⅴ様式中葉)が空白期として設定されている。桑飼上1期では、甕の内面のヘラケズリは頸部まで達しており、口縁端部に擬凹線文が施されるなど、志高では空白であった志高弥生Ⅶ期を埋めるものとして積極的に評価できる可能性がある。

次に、桑飼上2期は、1期とは型的に不連続である。甕にみる複合口縁は最も発達し、口縁部に施された擬凹線文も多条化している。この段階で、擬凹線文を施さない複合口縁の甕が共伴する(ナデ甕と通称されるもの)。この種の甕を含む割合により、さらに細分が可能である。志高弥生Ⅹ期の内容がほぼ対応する。

一方、由良川流域のⅤ様式併行期～布留式併行期の編年研究について先鞭をつけた中流域の綾部市青野西遺跡における成果は、桑飼上3期を考える上で、欠かすことはできない。すなわち、弥生後期～庄内式併行期にかけての土器様相は、青野西式の設定によって明らかかなように、豊富な器種構成が復原可能な、一括性の高い住居跡床面資料を骨子に組み立てられたもので、信頼性は高い。桑飼上2期から外面タタキ成形を施す甕を有する3期にかけての変化は、まさにこの青野西式の変化の中で起こったことであると捉えることができる。

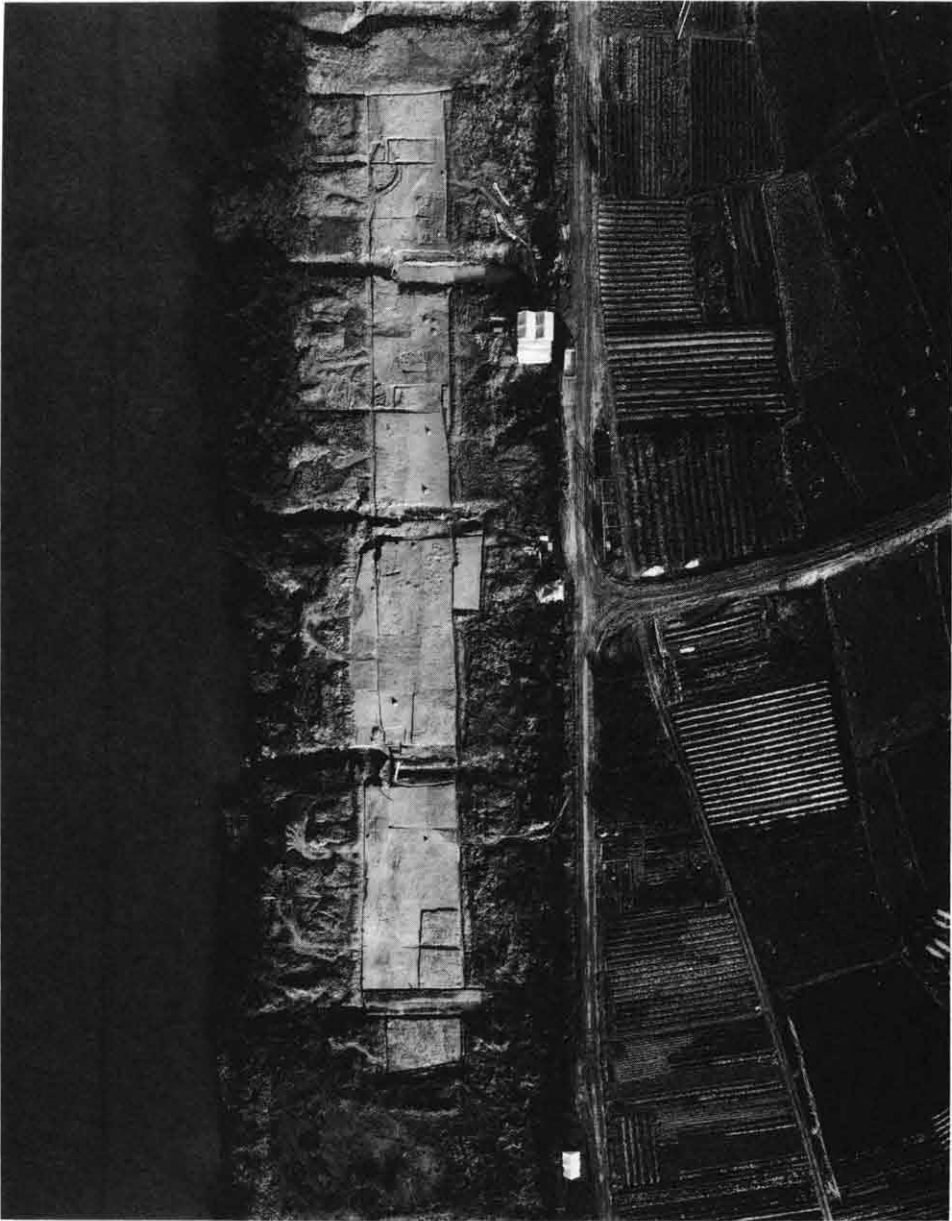
また4期には、有孔鉢が共伴するものの、布留式併行期の中でも最古段階には位置づけられず、3期とは型的に連続しない。

5期は、布留式新段階を主体とし、ごく少量須恵器が共伴する場合がある。須恵器の型式の下限はTK47型式である。

以上、弥生時代後期前半から古墳時代中期末といった年代にかけての住居構造の変化が現在までに知られた桑飼上遺跡の成果に現れていることになる。もとより、少ない住居跡数の中からは、未だ一定の法則性を見出すには至っていないが、想定されるべき円から方へという住居形の変化は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、複雑な過程で変化し

ていったことが予想できる。調査は現在も継続中であり、今後の調査・整理の進展を待つて資料の追加・修正を十分に行いたい。

(ほそかわ・やすはる＝京都府立丹後郷土資料館技師)



桑飼上遺跡航空写真

平成元年度 上人ヶ平遺跡の調査

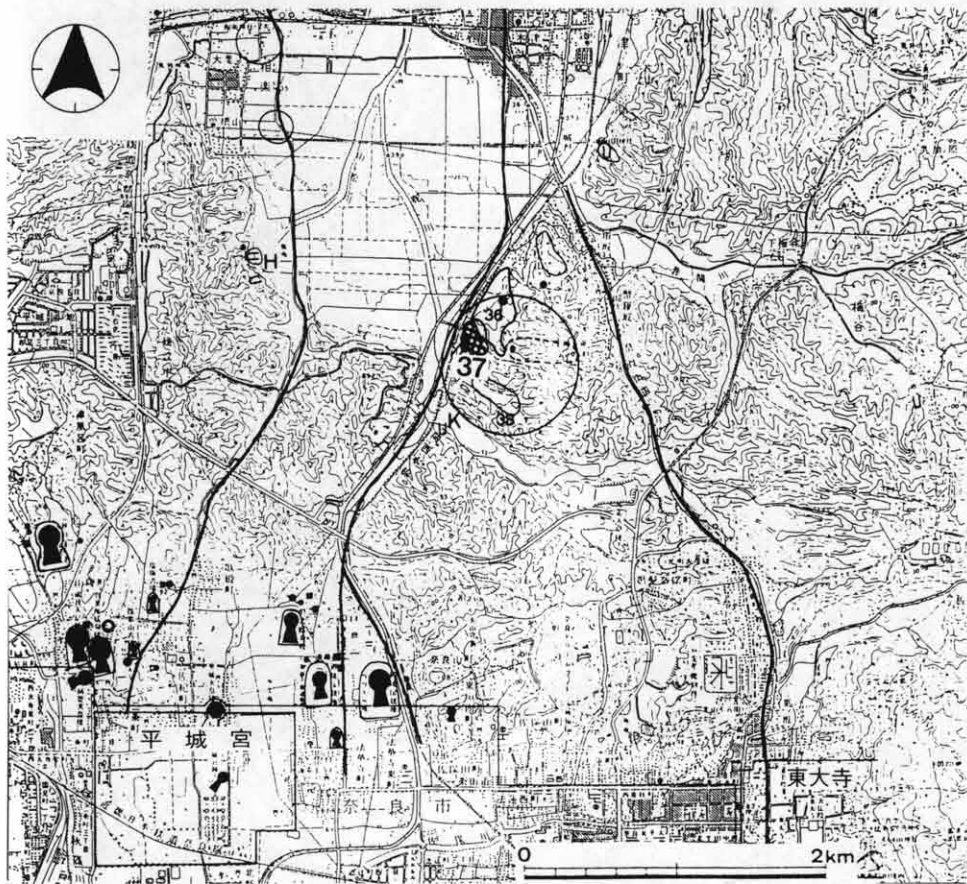
石井清司・伊賀高弘

1. はじめに

上人ヶ平遺跡は、京都府の南端の木津町に所在する遺跡である。

この遺跡の調査は、昭和59年から始まり、初めの3年間は遺跡の内容およびその拡がりを明らかにするための試掘調査を行った。

この結果、遺跡に立地する台地上のほぼ全域にわたって、さまざまな遺構が重複しており



第1図 上人ヶ平遺跡位置図

37: 上人ヶ平遺跡

り、とりわけ古墳時代および奈良時代の遺構が顕著であった。^(注1)

この試掘調査の結果を受け、昭和63年度は台地の南半分約4,800m²を対象に発掘調査を行い、16基の古墳と埴輪窯などを検出した。^(注2)

そして、平成元年度は、台地の北半分約7,500m²を対象に発掘調査を行い、古墳時代の建物跡と古墳・奈良時代の建物跡などが明らかとなった。ここでは平成元年度の調査で検出した遺構のうち、奈良時代の遺構群を中心にその概要を説明する。

2. 遺跡の立地

上人ヶ平遺跡は、山城盆地の最南端で、奈良県境を限る低い丘陵(平城山丘陵)の北側斜面に位置する。この丘陵のすぐ南側の大和盆地の北縁地域は、歴史的にも重要な地域で、古墳時代前～中期には巨大古墳群(佐紀盾列古墳群)、奈良時代には平城京や東大寺・興福寺などの官私の大寺院が造営されている。上人ヶ平遺跡はこうした遺跡に近接し、また平城山丘陵をはさんで対峙するという位置関係にある。

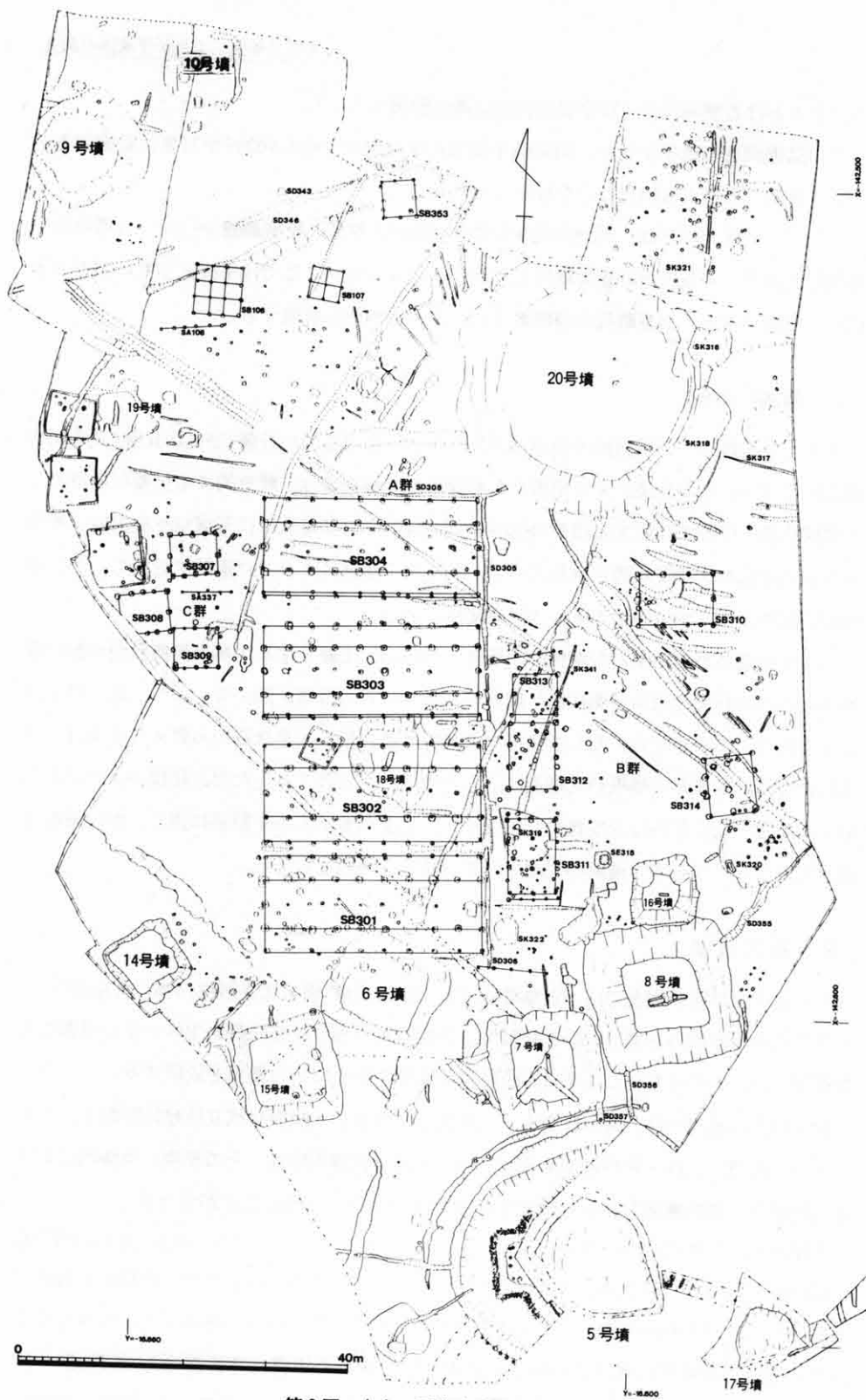
上人ヶ平遺跡が立地する台地性の丘陵は、州見山を主峰とする山塊の西側斜面の裾に存在する。この丘陵の西側斜面には、幾筋もの細長い谷が西側に開いているが、北へ行くほどその規模が小さくなる。そして京都と奈良の県境の最も大きな谷から数えて2本目と3本目の谷にはさまれた尾根の先端部に上人ヶ平遺跡が位置する。ただ、尾根の上といってもその先端は低く平らな台地状になっていて、生産基盤である平野部に面し、かつ適度な高台であるという点で、遺跡の立地としては格好な場所といえる。

3. 検出遺構

これまでの一連の調査では、古墳時代前期の集落遺構(竪穴式住居跡14基と倉庫3棟)、古墳時代中・後期の古墳(16基)と埴輪窯、奈良時代の掘立柱建物跡を主体とする遺構などを検出した。そのうち、ここでは奈良時代の遺構を中心にその概要を説明する。

奈良時代の遺構には、企画性をもって整然と配された大規模な掘立柱建物跡群と、それに付随した溝・土坑・井戸等がある。このうち掘立柱建物跡は、その規模、敷地内における占地状況、建物構造などから便宜上A・B・Cの3群に分けることができる。

A群はこれら建物跡群の中央部にあり、4棟の建物が南北に整然と並ぶ(南からSB301・SB302・SB303・SB304)。各建物跡は、東西約25.83～26.15m(9間、柱間約2.9m)×南北約11.48～11.64m(身舎2間+南北両面廂、柱間約2.9m)で、棟通りにも小さな柱がある。掘形の平面形は隅丸方形あるいは円形で、掘形の規模は身舎部分で一辺約50～80cm、廂部分で一辺40～60cmを測る。また掘形内に残る柱痕は身舎部分で直径20～30cm、



第2図 上人ヶ平遺跡遺構平面図

廂部分で直径15～20cmを測り、柱の用材をその使用する部位ごとに明確に区別している。このA群の建物跡の東半部の周囲には、幅20cm・深さ10cmの溝がめぐっている。この溝は側柱との関係から雨落ち溝とは考え難く、外域からの悪水処理施設と思われる。

A群の機能に関しては後で述べるように、4棟があたかも1つの建物空間を構成していることから、屋根(場合によっては壁)に覆われた広大な敷地(=床)面積を必要とする作業空間(瓦の成形・なま瓦の乾燥など)が想定できる。

B群(SB310・311・312・313)は、A群の東側に接してあり、2間×3間を基本とする建物で構成される。配置は、中央に井戸(SE315)があり、その北(SB310)と西(SB311・312・313)に建物が逆「L」字形に並ぶ。

この一群については、柱の径も小さく、小さな作業小屋あるいは工人等の生活空間(厨房)的な機能が考えられる。

C群は、A群の西側に接し、3棟が同一規模・構造の建物跡(SB307・308・309)で構成される。各建物跡は2間×4間で、長辺5.3～6.15m・短辺4.8m前後を測る。

このC群は、その周囲で日常汁器たる土器類の出土が他と比較して少なく、また同一企画による2棟一組の建物構成、特徴ある建物構造(平側支柱間に補助柱が入る)などから、用具等の保管施設(倉庫)とみるのも一案である。

建築遺構以外では、土坑や溝などを多数検出している。このうち、径6m前後の円形プランを基本とする浅い土坑(SK316～322)は、井戸とともに廃絶後塵捨場に転用されているが、本来は瓦粘土の精製施設(採土の放置・水砂との混入等)と考えられる。

また、SB301の北廂内に設けられた複数の楕円形土坑は、その内部に自然堆積とは考え難い精良粘土が充填された状態で残存しており、精製粘土の溜置施設の可能性がある。

4. 出土遺物

出土遺物については、現在整理中であり、十分な検討は行われていない。

ここでは、奈良時代の遺物についてのみ概要説明を行う。

奈良時代の遺物は瓦が大半であるが、瓦に混じって土師器・須恵器も出土している。

瓦は丸・平瓦が大半であるが、軒丸瓦・軒平瓦のほか、顔面の上顎以上をあらわした鬼面文鬼瓦(毛利光氏分類の平城宮Ⅴ式-B)^(注3)も数点出土している。

軒丸瓦は、6133ABC・6130B・6235M、軒平瓦は6732AC・6725B・6718A型式のものなどがあり、平城瓦編年のⅢ期(745～757年)に属するものが大半である。^(注4)

このほか、注意すべき遺物として、SK320から銅銭が出土している。このうち銭文のわかるものとして、萬年通寶(760年初鑄)1点、神功開寶(765年初鑄)2点がある。

5. ま と め

昭和59年度から調査を開始した上人ヶ平遺跡の調査も6年目を迎え、その全体像がようやく明らかになった。すなわち、上人ヶ平遺跡が立地する台地上は、集落(弥生時代後期～古墳時代前期)→古墳(古墳時代中・後期)→瓦工房(奈良時代後半)へと、その性格を時間的に重複することなく順次展開していくことが明らかとなった。

ここでは、奈良時代の遺構について、若干検討を行う。

奈良時代の遺構は、前述のようにA・B・C群の建物跡群のほか、井戸・土坑などがあり、同じ台地上の南西斜面には瓦窯(市坂瓦窯)がある。また出土遺物でも記したように、上人ヶ平遺跡からは多量の瓦が出土していることから、上人ヶ平遺跡が市坂瓦窯に関連した瓦生産に関わる遺構(工房施設)であることが考えられる。

そこで、奈良時代の遺構について、瓦生産との関連で、その復原作業を若干試みたい。

まず、これまでの研究成果や民俗例などから瓦生産の作業には、①粘土の準備(土取り・土打ち・粘土角材の作成)、②なま瓦の成形・調整、③乾燥、④焼成・製品のチェック等の工程があるものと推定されている。

これらのうち、②・③は雨水や天日を遮断するための施設が必要である。

ここで上人ヶ平遺跡で検出した遺構をみていくと、A群の建物跡の棟通りの柱列は、掘形や柱痕穴が他に比較して小さく、柱筋にばらつきがみえるので、建物の基本的な構造材とみるよりも、むしろ部分的に梁や棟木に渡す補助柱と思われる。したがって、このA群の建物は床貼りではなく土間と考えられる。

また、A群の建物跡は、一棟が4間×9間(床面積約300m²=約90坪)で、南北に4棟が整然と並ぶ。これら4棟の建物跡は、SB302の北廂とSB303の南廂、SB303の北廂とSB304の南廂の間に、雨落ち溝がなく、樋による雨水の集水が想定でき、それぞれの屋根が途切れていない一体の構造物と考えることもできる。この場合、建物間の空間を含めたA群全体の総面積は約1,430m²(433坪)となる。さらに、A群の各建物跡内には工房を窺わせる遺構は少ないが、SB301北廂の中央部に精良な粘土が底に堆積した楕円形土坑が3か所ある。

以上のことから、A群の建物は、工房全体の管理機能の一端を担いつつ、主としてなま瓦の成形・調整を行うアトリエと、なま瓦の乾燥を行った施設とみるのが妥当と思われる。

B・C群の建物に関しては、確証を欠くが、その構造や配置などから、その用途としてA群の建物の補助的・間接的機能をもつ建物と指摘し得る。特にB群の場合、井戸の存在や土器の一括出土から、工人集団の生計を支える機能を果たしたのかもしれない。

①の土打ち・粘土の精製には、建物跡の周囲に設けられた土坑や古墳の周溝の一部が利

用されたことを前述したが、粘土の採掘に関しては、その採掘跡として遺跡の南にある谷地形(現在その谷地形の一部は池として利用)を指摘することができる。この谷地形は現状で幅約20m・長さ約300m・深さ約5mを測るが、遺構の立地する段丘部とそれに続く丘陵尾根を分断する不自然な地形を呈し、古墳時代以降に人為的に掘られた可能性が高い。

④の焼成は前述のように上人ヶ平遺跡の立地する台地の南西斜面(A群建物跡の南端から約30m)にある市坂瓦窯でなされ、焼成された製品(瓦)は、いったん、台地上へ持ち運ばれ、製品のチェックを受けていたと思われる。これは、市坂瓦窯採集の瓦と上人ヶ平遺跡出土の瓦がほぼ同一形式のものであること、上人ヶ平遺跡でも多量の焼成後の瓦が出土することから窺うことができる。

このように、上人ヶ平遺跡の奈良時代の遺構は、隣接する市坂瓦窯も含め、瓦生産の一連の工程を復原できる内容をもった遺跡と評価できる。

遺構各所で出土した遺物から、操業が8世紀後半の比較的短い期間に特定でき、瓦の消費地(主として平城宮へ供給される)の関係から、聖武天皇の平城京遷都(天平17=745年)以降の宮域の造営・大改修を契機に築かれた官営瓦工房と考えられる。

上人ヶ平遺跡の調査に際しては、奈良大学岡田英男氏、奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏・毛利光俊彦氏・上原真人氏、国士舘大学大川清氏を始め、いろいろな方々より有益な助言を得た。末尾ではあるが、記して謝意を表したい。

(いしい・せいじ=当調査研究センター調査第2課調査第3係主任調査員)

(いが・たかひろ=当調査研究センター調査第2課調査第3係調査員)

- 注1 「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注2 「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注3 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文瓦—8世紀を中心に—」(『研究論集』Ⅳ 奈良国立文化財研究所) 1981
- 注4 『奈良国立文化財研究所基準資料』Ⅱ 瓦編2 1975

平成元年度発掘調査略報

20. 里 遺 跡

所在地 綾部市里
調査期間 平成元年10月18日～平成2年2月27日
調査面積 約1,000m²

はじめに 里遺跡は、由良川北岸の段丘上に立地する集落遺跡である。この遺跡では、以前から、古墳時代の須恵器や鎌倉時代の瓦器・土師器などが採取されており、長期にわたる遺構の存在が推定されてきた。

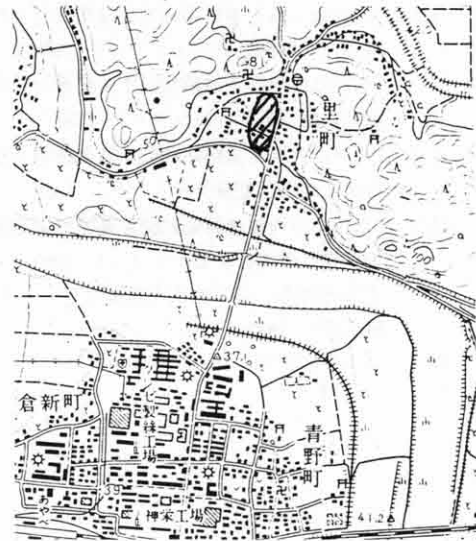
今回、この遺跡の範囲内に府道が建設されることになったため、当調査研究センターでは京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施した。

調査概報 発掘調査にあたっては、まず、遺構や遺物の分布状況を確認するため、試掘坑を対象地内の各所に設けて土層および遺物の分布状況などの観察を行った。その結果、全体にわたって遺構が分布していることが確認できたため、拡張区を設けて面的な調査を実施した。

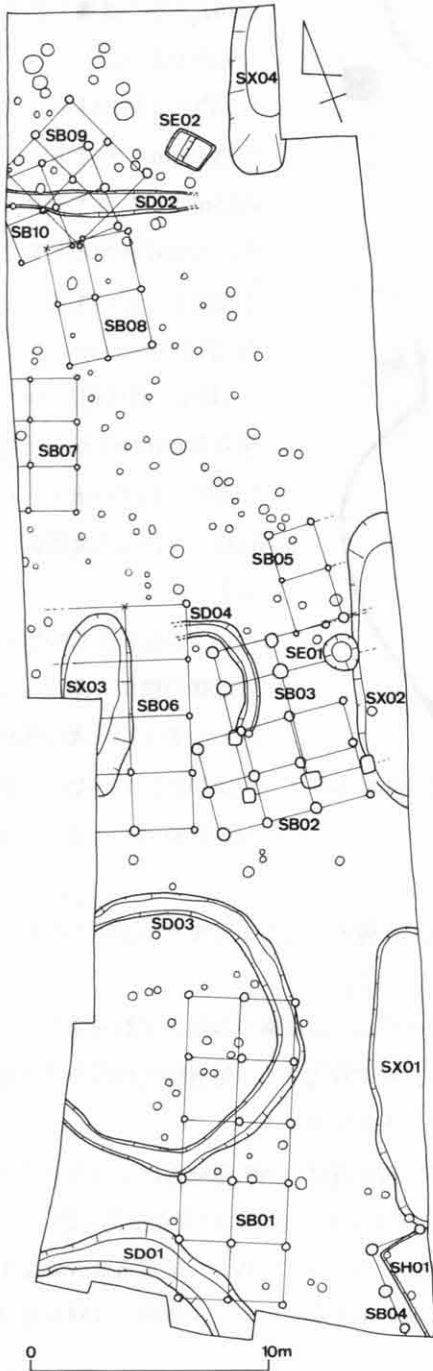
拡張区は神社参道をはさんで南北に2か所設け、北側をA地区、南側をB地区と称して調査にあたった。成果は以下のとおりである。

A地区 この地区では、弥生時代中期の落ち込み(SX01・02)や古墳の周溝と考えられる溝(SD01・03・04)、奈良時代の掘立柱建物跡(SB02・03・04)、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物跡(SB01・05・06・07・08・09・10)のほか、土坑・柱穴などの遺構とともに数多くの土器を検出した。以下、検出した遺構のうち主なものについて、時代別に説明する。

弥生時代の遺構 SX01・02は、地山が傾斜するラインに沿って、掘り込まれてい



第1図 調査地位置図



第2図 A地区検出遺構配置図

た。埋土の底で弥生時代中期(第Ⅳ様式)の壺、甕などの破片を検出した。

古墳時代の遺構 SD01は弧状を呈する溝である。幅約2.2m・深さ約30cmを測る。SD03は直径約12mの円形で、幅約1m・深さ約30cmを測る。SD01は部分的に確認したのみであるが、SD03と同様に円形になるものと思われる。これらは、古墳の周溝だけが遺存したものだろう。SD01からは土師器の杯身が1点出土した。SD04からも須恵器壺を検出している。

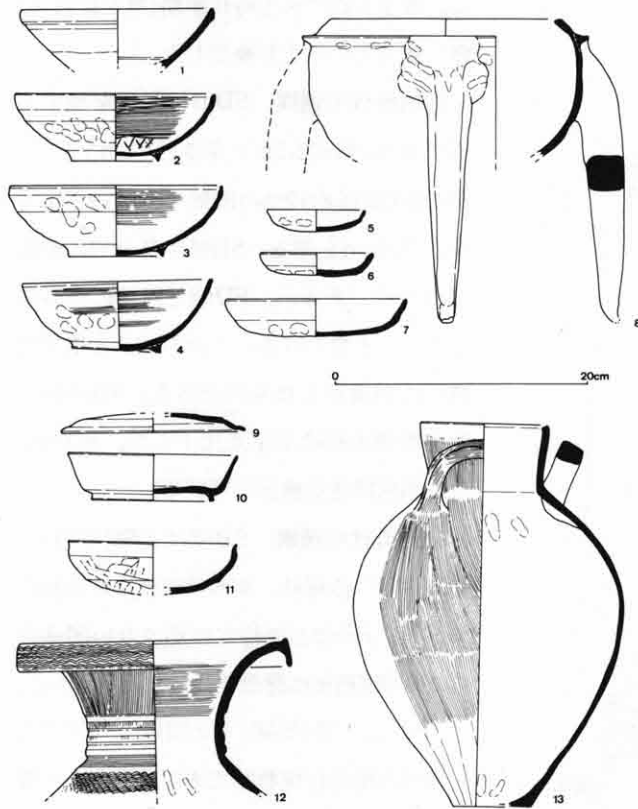
奈良時代の遺構 SB02は2間(梁間)×3間(桁行)の総柱、東西棟の掘立柱建物跡である。SB03との柱穴の切り合い関係から、SB03廃絶後に建造されたことがわかる。

SB03は3間(梁間)×2間以上(桁行)の東西棟の掘立柱建物跡である。北側の一間分は狭くなっており、廂と考えられる。柱穴掘形は円形と方形のものがあり、方形のものは一辺が30cm以上を測る。

SE02 1.8m×1.4mの長方形で、深さ約1mを測る。底面は、西半分が深く掘られ、半ばに段をつくる。井戸であろうか。

平安時代末から鎌倉時代の遺構 SB01は2間(梁間)×5間(桁行)の総柱、南北棟の掘立柱建物跡である。柱穴からは13世紀代の瓦器碗破片が出土した。SB06・07は全体の規模、年代は明確でないが、SB01と主軸方位がほぼ同じである。

SB08・10は2間×2間の掘立柱建物跡である。SB10は梁間2間×桁行2間以上である。これらは遺物を伴わないため、時



第3図 各遺構出土遺物実測図

SD02; 1~8 SB02; 10 SB03; 9 SD01; 11 SX01; 12 SX02; 13

期が明確でない。SB10はSD02を切っており、SD02以降の遺構であることがわかる。

SD02は幅約1m・深さ約30cmの溝である。約15mにわたって確認した。12世紀後半の瓦器や土師器が一括して出土した(第3図1~8)。

SE01 直径約1.5m・深さ50cmの円形の土坑である。12世紀後半~13世紀にかけての瓦器碗が出土した。

以上がA地区で検出した遺構の概要である。これらの他に堅穴式住居跡(SH01)があったが、部分的に検出しただけである

るので詳細はわからない。

B地区 この地区では、柱穴を多数確認したが、遺構としてのまともは認められなかった。他に古墳周溝とみられる溝の一部を検出している。

まとめ 今回の発掘調査の結果、里遺跡では以上のような遺構・遺物を多数確認し、この遺跡が弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代末から鎌倉時代初期の4時期を中心とする複合遺跡であることを明らかにすることができた。

綾部市域では、由良川左岸において青野遺跡群、綾中遺跡、西町遺跡をはじめとする大型の集落遺跡がこれまでの調査で確認されている。それに対し右岸では調査事例に乏しく、集落の実態について不明な点が多い。今回の調査は、右岸域での新たな集落遺跡の確認事例として注目される。当地域の集落遺跡の変遷を明らかにしていく上で貴重な資料を提供することとなった。

(田代 弘)

21. 仏南寺城跡

所在地 綾部市里町・有岡町
 調査期間 平成元年12月12日～平成2年3月10日
 調査面積 約500m²

はじめに 仏南寺城跡は、綾部市街を南に見下ろす標高74～80mの丘陵上に位置する。城館の中心部は、丘陵尾根頂部を平坦にして曲輪を築き、周囲に空濠・土塁をめぐらせている。綾部市全体で中世山城跡は、数十か所知られているが、当城跡を含めて城主の名が伝えられていない城跡も多い。また、付近には弥生時代から鎌倉・室町時代にわたる里遺跡・綾中遺跡・青野遺跡などが沖積地上に分布している。調査は、南側の里遺跡とともに、府道の敷設工事に先立ち実施した。調査範囲は、城の東側の土塁を含む東の丘陵尾根筋であり、したがって城跡の曲輪中心部は調査対象からはずれている。

調査概要 調査は、尾根に沿って長いトレンチを設定し、城館隣接部から久田山丘陵に向かう東端の平坦面にかけて、遺構・遺物の有無を確認することにした。丘陵裾部(緩斜面)についても遺構の存在を予想し、尾根に直交するトレンチを適所に配した。

調査の結果、城館の土塁中から土師器皿1点が出土した。磨滅が著しく正確な年代は不明であるが、形態上から城館築造以前(平安時代)のものと考えられる。また、丘陵東端の平坦面からは、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺物が出土した。さらに裾部と平坦面との間で、溝を一条確認した。丘陵上に造られた台状墓に伴う溝である可能性がある。溝内に遺物はなかったが、周辺から器台・甕・壺などの破片が出土した。

今回の調査では、仏南寺城の中心部からはずれたところに当たるため、城に関わる遺物の出土はなかったが、丘陵東側で台状墓の存在を証明する遺構・遺物が得られた。遺構・遺物の内容については、後日詳細を明らかにしたい。

(黒坪 一樹)



調査地位置図(1/50,000)

22. 天若遺跡

所在地 船井郡日吉町天若小字森形他
調査期間 平成元年12月8日～平成2年2月23日
調査面積 約1,200m²

はじめに 天若遺跡は、桂川の上流域で舌状に残る河岸段丘上に立地する集落遺跡である。調査は、日吉ダムの建設にともない、水資源開発公団の依頼を受けて行った。

調査概要 今回の調査は、遺構・遺物の有無、分布状況の把握を主たる目的とした試掘調査である。調査対象面積は、約2万m²の広範囲にわたる。まず、10か所にトレンチを設定したが、各所で遺構・遺物とも確認されたことから、最終的に20か所のトレンチを設定した。各トレンチについては、遺構の検出状況に応じて拡張を行った。その結果、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑等多数の遺構を検出し、当初の予想を上回る多大な成果を取めた。以下、調査成果を簡略にまとめる。

①天若遺跡は、古墳時代から江戸時代まで断続的に形成された集落遺跡である。遺跡の範囲は約1万m²と広範囲におよぶ。

②古墳時代の竪穴式住居跡は、4か所のトレンチで検出した。各住居跡とも方形住居であり、一辺5～6mを測るものが主体を占める。住居跡の時期は、埋土内から出土した須

恵器より、後期初頭頃と考えられ、当該時期の集落形態の全容を知り得る可能性がある。

③飛鳥時代に属する遺物の出土によって、古墳時代に続く集落の存在が予想される。

④中世の遺物は広範囲に広がり、掘立柱建物跡を中心とする中世の集落形態を知り得る可能性がある。



調査地位置図(1/50,000 京都西北部)

(鍋田 勇)

23. 八木嶋遺跡第1次

所在地 船井郡八木町八木嶋
 調査期間 平成元年12月12日～平成2年3月9日
 調査面積 約1,500m²

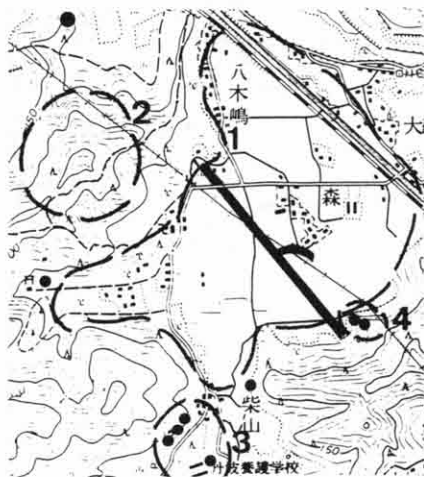
はじめに 今回の発掘調査は、国道9号バイパス(京都縦貫道)の建設に先立ち実施したものである。八木嶋遺跡は、大堰川の西岸に位置し、西方より大堰川に流れ込む東所川の沖積作用により形成された扇状地上に立地する。周辺には、昭和53年度、京都府教育委員会によって発掘調査が実施された坊田古墳群がある。当初、この坊田古墳群をはじめとして、八木嶋遺跡の周辺には古墳群が多数存在することから、これらの古墳群を造営した人々のムラが確認できるのではないかと期待された。

調査概要 調査は、バイパス予定路線内に、幅5mで任意にトレンチを16か所設定した。

5トレンチでは、調査地南西隅で溝状遺構を確認した。この中から、古墳時代後期の須恵器の甕片が多量に出土した。それに加えて、奈良・平安時代の須恵器・土師器や、緑釉陶器、灰釉陶器なども確認している。6トレンチは、耕作土除去後すぐに直径約40cmを測る柱穴を確認した。柱穴の中には、柱痕を残すものもあった。7トレンチは、すべてのトレンチ中、最も良好な状態で遺構を確認することができた。南半部では、一辺60cm前後を測る隅丸方形の柱穴をまとめて確認した。包含層遺物としては、古墳時代～鎌倉時代の遺物がまんべんなく出土している。8トレンチも、7トレンチとほぼ同じような状況を呈している。ただし、7トレンチのように建物としてまとめて確認するには至らなかった。

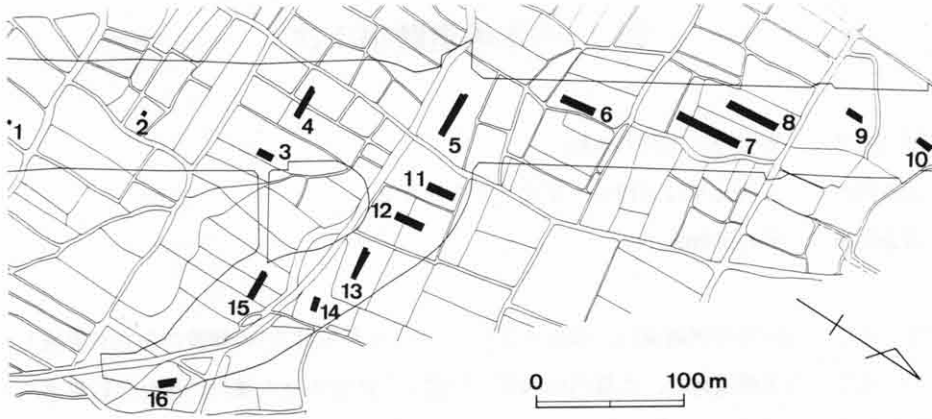
おわりに 今回の試掘調査によって、八木嶋遺跡は古墳時代から鎌倉時代に及ぶ複合遺跡であることがわかった。今回の発掘調査では、遺構の面的な広がりには確認し得なかったものの、次年度の調査が期待される。

(鴉島 三寿)

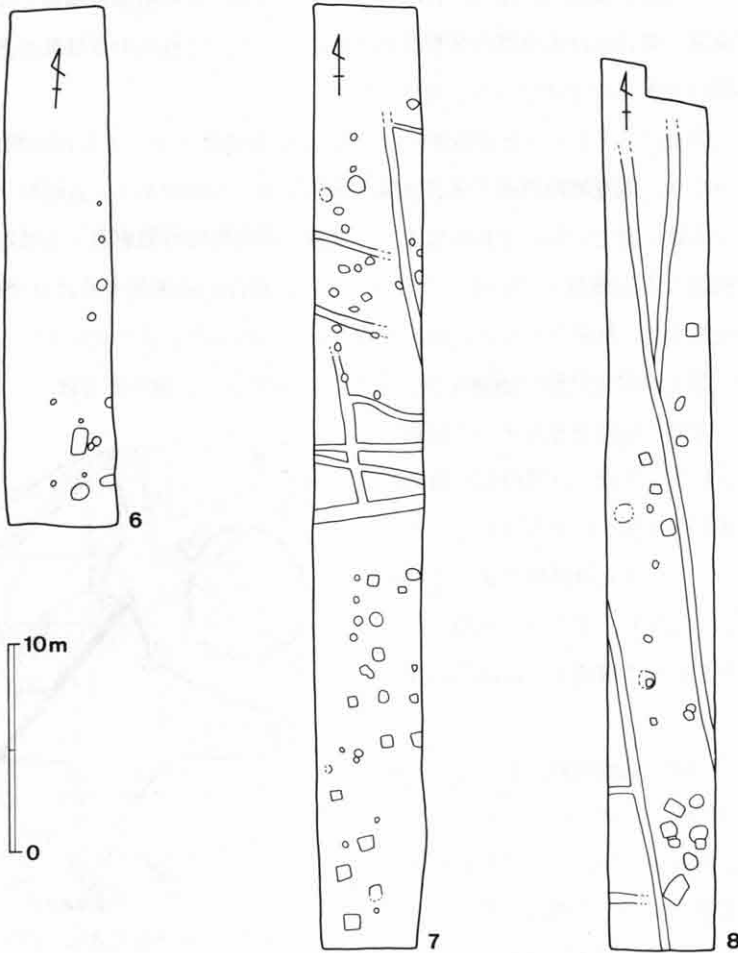


第1図 調査地位置図(1/25,000)

1. 八木嶋遺跡 2. 八木城出城跡
 3. 坊田古墳群 4. 森古墳群



第2図 トレンチ設定図



第3図 遺構平面図

24. 千代川遺跡第16次

所在地 亀岡市千代川町北ノ庄
 調査期間 平成元年7月21日～平成2年2月28日
 調査面積 約3,100m²

はじめに 今回の発掘調査は、京都府土木建築部が進める「府道千代川・北ノ庄線改良工事」に伴うものである。今回の調査は千代川遺跡の第16次調査にあたる。

千代川遺跡は亀岡盆地の西北部に位置し、JR千代川駅の西に広がる水田地帯、東西約1.4km・南北約2kmの範囲が遺跡と認識されている。これまでの発掘調査(1～15次調査)の成果から、千代川遺跡は縄文時代後期～室町時代にかけて営まれた集落跡であることが判明している。この千代川遺跡内には、丹波国府跡(推定)・桑寺廃寺等が含まれ、府内でも有数の大複合遺跡と言えるものである。

調査地は千代川遺跡の西北部、大堰川の支流の一つである千々川によって形成された扇状地に位置する。丹波国府跡との位置関係では、西部国府域外となる。調査は西北丘陵裾から東南の国府跡西限部付近まで、全長約550m・幅約12mの範囲で実施した。

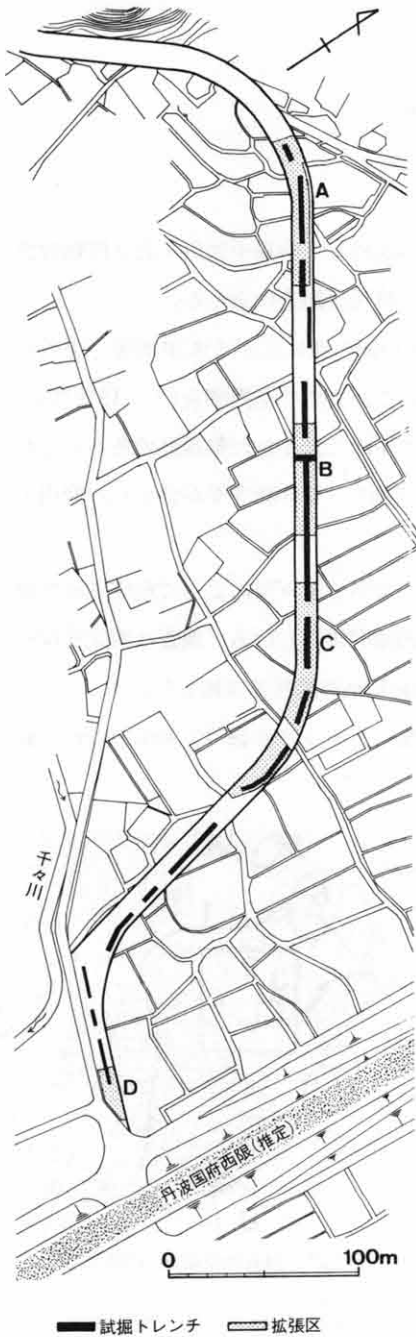
調査概要 調査は、調査対象地内の15か所に3m幅のトレンチを設け、約1,100m²の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、調査対象地内の4か所で遺構・遺物の集中が認められたことから、この4地点を拡張して面的調査(A～D地区)を実施した。以下、主な調査の成果について述べる。

A地区では、掘立柱建物跡3棟・溝・土坑・井戸(近代)・河川跡を検出した。古墳時代後期～室町時代にかけての土器が出土し、須恵器杯底部外面に「□夫」の墨書が残る墨書土器も1点存在した。B地区では、奈良時代～室町時代に属する多数の柱穴跡が存在し、掘立柱建物跡9棟を検出した。うち1棟は総柱建物跡であった。その他の遺構として、調査地東端部で古墳時代後期の溝を検出した。古墳時代後期～室町



第1図 調査地位置図(1/50,000)

- A. 調査地
- | | |
|-----------|-----------|
| 1. 千代川遺跡 | 2. 丹波国府 |
| 3. 桑寺廃寺 | 4. 上川関古墳群 |
| 5. 大法寺古墳群 | 6. 拜田古墳群 |
| 7. 北ノ庄古墳群 | 8. 小金岐古墳群 |



第2図 調査区配置図

時代にかけての土器のほか、縄文時代後期の土器の出土もみている。

C地区では、古墳時代初頭～平安時代の河川跡、平安時代後期の溝跡、鎌倉～室町時代の井戸跡・土壇墓・土坑(配石や集石を伴う)等を検出した。井戸内から下駄の出土もみている。

D地区では、古墳時代後期に属する竪穴式住居跡2基、溝跡を検出した。調査地内で縄文時代後期の遺物包含層を検出したが、同時期の遺構は検出できなかった。

C地区とD地区間は、中世～近世の土器を含む砂層の堆積が著しく、調査地の南を流れる千々川の旧流路にあたるのが判明した。

まとめ 今回の調査で検出した掘立柱建物跡群は、その主軸方向からおよそ4期に別れることが判明した。それぞれ第Ⅰ期(奈良時代)にはB地区で1棟、第Ⅱ期(平安時代初頭)ではA地区で2棟・B地区で2棟、第Ⅲ期(平安時代後期)ではB地区で3棟、第Ⅳ期(鎌倉～室町時代)がA地区で1棟・B地区で3棟であった。第Ⅳ期の建物跡群が主軸をほぼ真北に取るが、他の時期の建物跡群はそれぞれ独自の方位を取っている。調査範囲が限られているため建物跡の全容をつかめたのはわずかであったが、第Ⅰ～第Ⅲ期に属する建物跡群は、時期・配置状況・出土遺物の内容等からみて、丹波国府に関連した建物群の可能性が高い。

丹波国府に関しては不明な点が数多く、いまだに推定の域を脱し得ない段階である。今後の当地域での調査が期待される。

(竹原 一彦)

25. 中海道遺跡第17次(3NNANK-17)

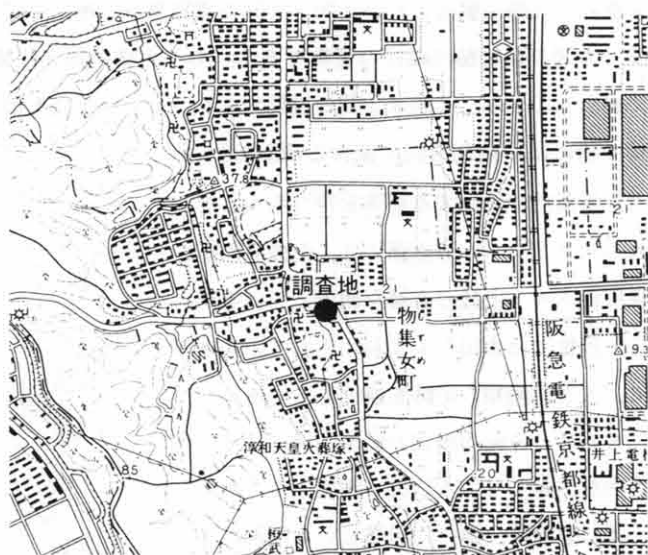
所在地 向日市物集女町御所海道
 調査期間 平成元年11月20日～平成2年2月15日
 調査面積 約360m²

はじめに 今回の調査は、府道久世北茶屋線緊急街路整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。中海道遺跡は、昭和46年以来16回にわたる発掘調査によって弥生時代から平安時代の集落跡及び、旧石器時代から近世にかけての遺物が確認されている。

調査概要 今回の調査は、東部と西部を2回にわけて発掘調査を行った。東部地区では中世の溝・柵列、奈良・平安の溝・掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴式住居跡・溝、弥生時代の土坑が検出できた。中世の遺物には、青磁碗・白磁碗・瓦器碗・褐釉耳壺・青銅製品等が見られる。奈良・平安時代の遺物には、緑釉陶器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器がある。古墳時代の遺物には、竪穴式住居跡内から初期須恵器とともに多くの土師器が出土した。

西部地区では、流路のみを検出した。流路内から、弥生時代末期と考えられる土器がほぼ完形の状態で出土した。器種には、壺・甕・高杯・器台がある。

まとめ 今回の調査によって、中世・奈良・平安・古墳・弥生の各時代の遺構が検出できた。中世の遺物には白磁・青磁といった輸入陶磁器が見られ、奈良・平安期には、一般集落では検出されることがまれな、瓦が出土した。また古墳時代には初期須恵器(TK73併行)の土器が多く見られることから、各時代を通じて一般的集落とは異なった集落が営まれていたものと考えられる。(中川 和哉)



調査地位置図(1/25,000)

26. 内里八丁遺跡

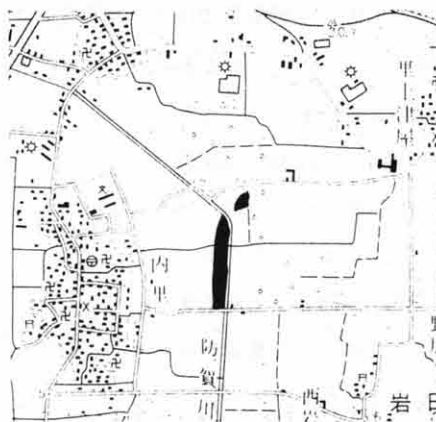
所在地 八幡市内里八丁ほか
 調査期間 平成元年5月18日～平成2年2月27日
 調査面積 約3,800m²

はじめに 内里八丁遺跡の調査は、第二京阪道路建設に伴う事前調査である。内里八丁遺跡は、木津川によって形成された沖積平野に立地し、周辺には古墳時代中期の竪穴式住居跡を検出した新田遺跡等がある。内里八丁遺跡の試掘調査は昭和63年度から行われており、木津川の氾濫原であることを確認している。

調査概要 今回の調査は、昨年度調査地の北方の試掘から始めた。その結果、昨年度調査地に隣接する部分では木津川の氾濫原の様相を呈していたが、調査地北部で溝を検出したため、トレンチを拡張して調査を行った。

調査の結果、古墳時代と飛鳥・奈良時代の少なくとも2面の遺構面があることがわかり、今年度は上層の飛鳥・奈良時代の遺構面の調査を行った。検出した遺構は、竪穴式住居跡1基、掘立柱建物跡4棟、溝、土坑などである。竪穴式住居跡SH07は、トレンチ北西部で検出しており、長辺4.4m・短辺3.75mの隅丸長方形の住居跡である。北東コーナーにカマドを持ち、焚き口付近から土師器の長胴甕が出土している。掘立柱建物跡はトレンチ北東部で3棟を検出した。2間×2間の建物跡が2棟、2間×1間の建物跡が1棟で、2間×2間の建物跡は総柱の建物である。もう1棟の掘立柱建物跡SB22はトレンチ南東部で検出しており、2間×3間の規模である。トレンチ北東部の掘立柱建物跡と竪穴式住居跡の間には、南北方向に流れる溝SD08があり、集落内を区画する意味を持つものと思われる。またトレンチ南部では、氾濫原に続く青灰色シルトと砂の互層を検出しているが、中・近世には水田として利用されていたようで、人と偶蹄類の足跡を検出している。

まとめ 今回の調査の結果、溝によって集落内を区画している状況が判明した。おそらく東に倉庫群、西に住居域という区画がなされていたものと思われる。(荒川 史)



調査地位置図(1/50,000)

27. 興戸遺跡第6次

所在地 綴喜郡田辺町興戸

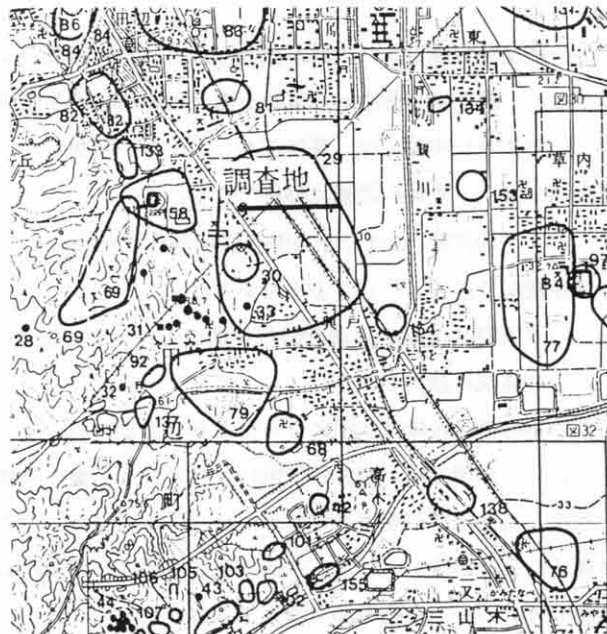
調査期間 平成元年11月9日～平成2年2月27日

調査面積 約1,500m²

はじめに 今回の発掘調査は、国道307号道路新設工事に先立つもので、京都府田辺土木事務所の依頼を受けて実施したものである。発掘対象となった興戸遺跡は、田辺町の中央部にあり、西端は丘陵裾、東は水田地帯までの東西約600m、南北約750mの広大な遺跡で、過去5回の調査で弥生時代中期から平安時代にかけての複合であることが判明している。また、近隣には興戸廃寺があり、遺跡を縦断する形で古代山陰道が推定されているなど、いろいろな点で注目される地点である。

調査概要 第1図のように、発掘場所は遺跡を東西方向に横断する形となっており、全長約450mで幅20mである。西端は府道木津八幡線で、そこから東へのびる調査地は、JRと近鉄とで3分割されている。今回は調査地東部、近鉄以東を本格調査し、他の地点を試掘調査した。調査はトレンチを設定することから始めた。この10か所の試掘によって、基本的な層序は、現代の耕土(深さ40cm)の下に中世の耕土(厚さ10cm)、奈良時代(約1,300年前)の土器などが包含されている土層(10cm)、部分的に弥生時代(約2,000年前)の土器が包含されている土層である。

遺構については、もっとも東端ではほとんどなく、近鉄線に近づくに従って、奈良～平安時代前期の掘立柱建物跡がまとまって検出された。近鉄線より東へ30mの地点では、東北東方向にのびる自然流路を検出し、そこで弥生時代終りから古墳時代初めの遺物を検



第1図 調査地位置図(1/25,000)

出した。この流路は幅約2m・深さ約1mで、断面「V」の字状となっている。

この流路の南方で、弥生時代中期の墓1基を検出した。隅丸方形の穴の中に長頸壺を組み合わせたものを埋置しており、骨は遺存していなかったが、その形状から墓である可能性が高い。同様の形状をした穴が近接して2か所検出されたので、一時期墓地として使用されたい。

遺物については、南山城では珍しい縄文時代晩期長原式の甕胴部片1点(1)が出土した。これは胎土に特徴があり、いわゆる生駒西麓産と思われる。弥生時代については、接合途中ではあるが、壺(2)の良好資料が得られた。奈良～平安時代については、須恵器硯片1点(3)や緑釉陶器片が出土した。

まとめ 上述した遺構・遺物は、本格調査した東部地区のみである。ここではその地点の成果を簡単にまとめ、今後の調査の指針としたい。

(1)縄文時代晩期から人跡が認められた。特に長原式は弥生時代初期との時間差がほとんどなく、縄文から弥生への変化を考える際に必要な資料となった。

(2)弥生時代中期には、墓地であったことが判明した。これは近隣に村があったことの証拠でもあり、今後の調査に期待できる。

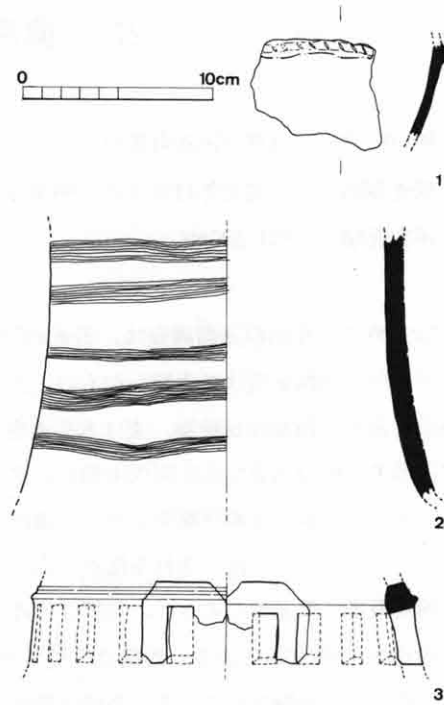
(3)7～10世紀、つまり奈良時代直前から平安時代まで、遺物や遺構が確認できたので、ほぼ連続して居住していたようである。

(4)平安時代末期から鎌倉時代前期にも村があったようである(掘立柱建物跡のいくつかがこの時期に該当しよう)。

(5)室町時代以降は水田になったようである。

これらの事実の内、奈良時代頃に注目すると、興戸遺跡の西端で、立派な掘立柱建物跡を検出した例や興戸廃寺の存在、今回の硯の検出など、官衙施設が近隣に存在した可能性の高いことを示唆している。今回の東部地区は「官衙に出仕する人々が住んでいた村」と理解しているが、今後西部を調査することによって、より鮮明となるだろう。

(伊野 近富)



第2図 出土遺物実測図

資料紹介

遠所遺跡群出土の銅鏃

増田孝彦

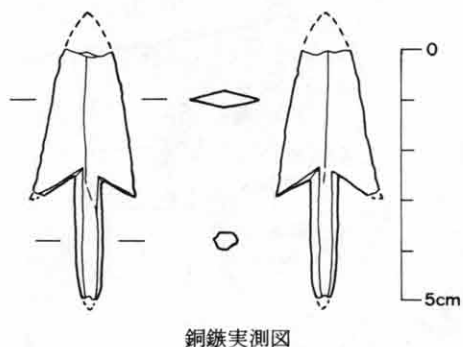
今回報告する資料は、平成元年度に調査を行った遠所古墳群南側の谷部(J地区)の人工流路跡より出土したものである。

流路は、長さ約40m・幅約1.5～4m・深さ約0.5～1.5mを測り、始まり部分ほど残りがよく、中ほどで「く」字状に曲がる。内部埋土は、全体的に炭・灰が混入しているが、流路上方に地下式の須恵器登窯状の炭窯2基(1基は天井部が完存)があるためか、下層ほどその量は多量に認められた。これらとともに多くの須恵器・土師器・木製品・石器・種子が出土したが、いずれも5世紀末～6世紀前半頃に比定される遺物である。銅鏃は、水田の開墾により流路がやや浅くなった第3層中より出土したもので、共伴して出土した須恵器は、陶邑編年のTK47型式のものである。

銅鏃は、有茎で断面は菱形を呈し、鑄ぎがある。平面形は、逆刺が鋭く二等辺三角形状をなす。切先・逆刺・茎の一部を欠くが、残存長5cm・鏃身長3cm・鏃身幅2.1cmを測る中型の銅鏃である。残りがよく、刃部は鋭く尖っている。

銅鏃は、全国的にみても近畿地方からは多く出土しているが弥生時代に出現し、古墳時代中期まで認められている。出土した銅鏃は、周辺から溝内遺物より古い段階のものが認められないことから、単独で存在していたものが混入していたとも考えられるが、銅鏃という性格を考えた場合疑問が残る。もし溝内遺物に伴うとするならば、もっとも新しい1例となる。遠所遺跡群自体現在も調査中であり、今後の資料の増加を期待するとともに、調査が終了するのを待ち検討していきたい。

(ますだ・たかひこ=当センター調査第2
課調査第1係主任調査員)



府下遺跡紹介

47. 御上人林廃寺

御上人林廃寺は、京都府亀岡市河原林町河原尻にあって、現在は建物が建っていた土壇などの痕跡があるだけで、寺院は存在していない。この寺跡の東方約400mのところには史跡丹波国分寺跡が所在するといったように、このあたりは古代に寺院が存在していたところである。第二次世界大戦前からここが丹波国分尼寺の有力な比定地であったが、1972年以降の数次にわたる発掘調査によって、国分尼寺跡であることがほぼ確認されるに至っている。

国分尼寺は、国分僧寺とならんで、8世紀ごろから全国的に造られた寺院で、各国毎に一对で造営された。この僧寺と尼寺を総称して国分寺と呼ぶが、これは、井上薫氏の研究によれば、天平9(737)年から造営が始まり、同13(741)年3月に国分寺建立の詔が発せられて造営が本格化したと考えられている。この国分寺建立の詔では、その財政的基盤として、僧寺に封50戸・水田10町、尼寺に水田10町が与えられることになっている。また、僧寺に20名、尼寺に10名の僧尼を住まわせてその経営に当たらせることになっていた。この丹波国分尼寺でも同じような方針がとられたことは確実で、10名の尼と、水田10町が充てられたことが推定される。

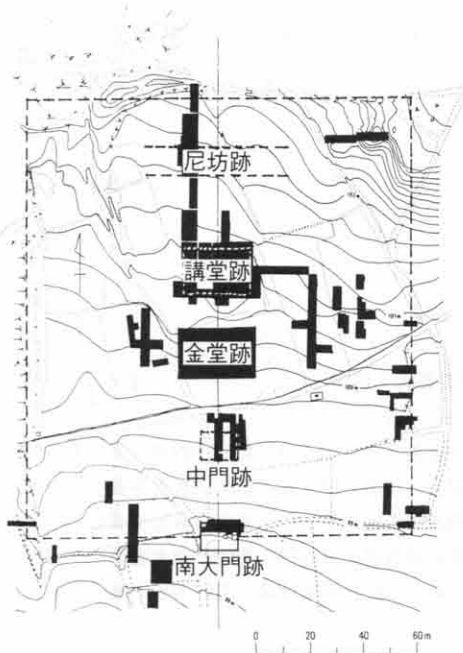
国分尼寺の伽藍配置は、国分寺式と呼ばれる配置の簡略化されたもので、塔が全く存在しない形式の寺院が多い。僧寺の方は、二つの塔をもつ東大寺式伽藍配置を簡略化したも



第1図 遺跡所在地(1/50,000)

ので、塔が一つだけになることが多い。尼寺の方は、塔そのものが存在しない形式のものが多くなるが、国分寺式伽藍配置の中に含めている。

丹波国分尼寺は、長らくその所在が不明であった。1937年になって観音芝廃寺の地が国分尼寺跡とする説が角田文衛氏によって提唱された。これに対しては賛否両論があったが、1938年の『国分寺の研究』では、八木茂美氏が批判して、新たに御上人林廃寺を国分尼寺とする意見を提唱されるに至



第2図 伽藍配置図

った。それによれば、この地は、現在ではもっぱら御上人林と呼ばれているが、かつて地元では「尼寺ガ堂」と呼ばれていたこと、国分僧寺と距離的に近いことから、御上人林廃寺こそが国分尼寺であると結論されている。

当時の研究としては、きわめて卓見であるといえる。特に、古い小字名のなかに「尼寺ガ堂」というのがあったとする点は注意される。その他、このあたりの古い小字名の中には、「シャカン堂」・「薬師前」・「踊場」と称するものがある。シャカン堂が釈迦堂のなまったものとすれば、これらの小字名は、いずれも寺院と関係する地名ということになり、御上人林廃寺が丹波国

内でも重要な寺院であったことの傍証となろう。

この御上人林廃寺では、1972年以降の発掘調査によって、注目すべき知見が得られた。第1次調査では金銅跡の土壇を中心に調査が進められ、基壇規模が東西90尺(27m)・南北60尺(18m)となり、南北の両縁部には約13mの階段が取り付けいていたことがわかった。建物の規模も、5間×4間の柱間をもつ、かなり規模の大きなものであることも確認されている。第3次調査では、寺域の南限と西限の土塁がわかり、第5次調査に至って寺域の東限にあると推定される溝が見つかり、寺域としては、東西約150m・南北約180mとなることが明らかになった。特に、第5次調査では、講堂跡の調査も行われ、その規模がわかっただけでなく、第6次調査に至っては南大門跡も見つかり、ここが塔のない東大寺式伽藍配置をとることが最終的に確認された。しかも、国分僧寺の寺域の南限ラインと、国分尼寺の南限ラインが揃うことも確認された。当時の国分僧寺と国分尼寺の関係がどのようなものであったかを推定しうる資料ともなったのである。

出土遺物も多く、8世紀以降の須恵器・土師器・緑釉陶器をはじめ、瓦類、中でも軒丸瓦・軒平瓦が出土した。この軒瓦には、国分僧寺で見つかっている「忍冬文系」軒丸瓦が含まれていることから、最終的にこの御上人林廃寺が丹波国分尼寺跡であると判断されるに至った。

この地域は、現在、静かな田園地帯の中であって、この寺跡の東側には史跡丹波国分寺

跡として国分僧寺が存在しているが、このような寺院が二つも並ぶような状況であった8世紀には、この地域がかなり開発の進んだところであったことがわかる。僧寺の方は、現在も寺院が存在し、法燈が伝えられている。

(土橋 誠)

〈参考文献〉

- 角田文衛「丹波国分尼寺」『考古学研究会々報第1回』1932
八木茂美「丹波国分寺」『国分寺の研究』下巻 1938
『亀岡市河原林町御上人林発掘調査報告』亀岡市教育委員会 1973
『御上人林発掘調査報告(第2次)』亀岡市教育委員会 1977
「御上人林廃寺第3次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第6冊 亀岡市教育委員会) 1978
「御上人林廃寺第4次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第8冊 亀岡市教育委員会) 1979
「御上人林廃寺第5次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第10冊 亀岡市教育委員会) 1980
「御上人林廃寺第6次発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第11冊 亀岡市教育委員会) 1981
樋口隆久「丹波国分寺」(『京都府埋蔵文化財情報』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

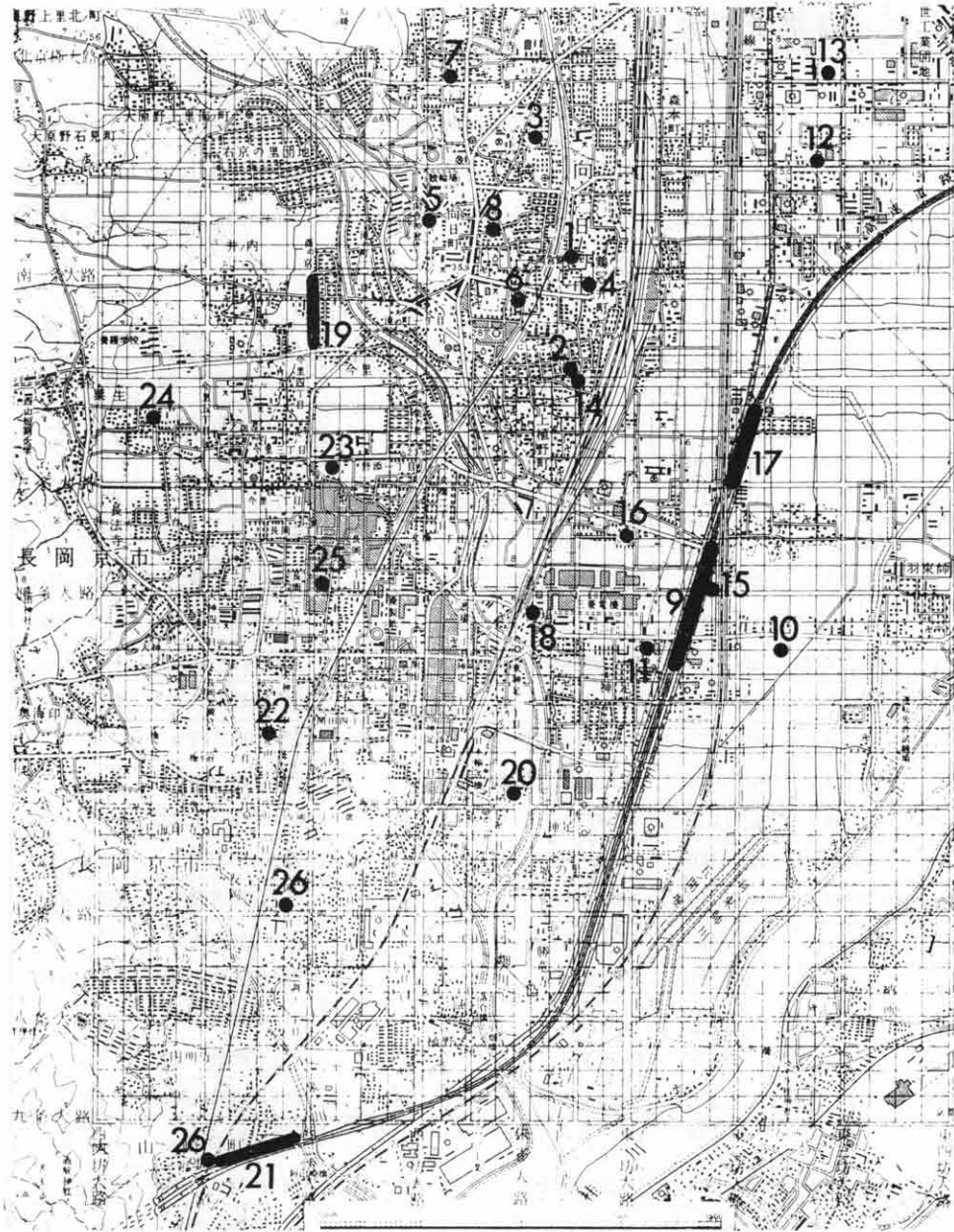
長岡京跡調査だより・32

平成2年2月21日・3月28日・4月25日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域8件、左京域10件、右京域9件の計27件であった。これら27件の調査地は、位置図・一覧表のとおりである。このうち、主なものいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1990年4月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内235次	7AN9V	向日市鶏冠井町御屋敷27-1	(財)向日市埋文	1/17~2/10
2	宮内236次	7AN10N-2	向日市上植野町浄徳11-40他	(財)向日市埋文	1/9~2/13
3	宮内237次	7AN7L	向日市寺戸町東野辺58	(財)向日市埋文	1/16~3/16
4	宮内238次	7AN4F	向日市鶏冠井町東井戸47・49-1	(財)向日市埋文	2/22~
5	宮内239次	7AN18D	向日市向日町北山35-2	(財)向日市埋文	3/19~4/24
6	宮内240次	7AN14T	向日市鶏冠井町山畑	(財)向日市埋文	3/26~4/10
7	宮内241次	7AN16F	向日市寺戸町西垣内1	(財)向日市埋文	4/1~4/14
8	宮内242次	7AN13L	向日市寺戸町東ノ段25-1他	(財)向日市埋文	4/16~
9	左京216次	7ANMTD 他	長岡京市勝竜寺~京都市伏見区	(財)京都府埋文	4/4~
10	左京233次	7ANXOK-3	京都市伏見区羽東師古川町	(財)京都市埋文	10/2~
11	左京235次	7ANLRB-2	長岡京市馬場六ノ坪1-4	(財)長岡京市埋文	1/8~4/28
12	左京236次	7ANVHR	京都市南区東土川町	(財)京都市埋文	12/25
13	左京237次	7ANVUC-2	京都市南区久世大藪町	(財)京都市埋文	1/5~3/23
14	左京238次	7ANFJK-3	向日市上植野町浄徳17-1	(財)向日市埋文	2/26~3/17
15	左京239次	7ANLMD	長岡京市馬場餅田29他	(財)長岡京市埋文	3/13~4/12
16	左京240次	7ANFOR	向日市上植野町落堀16-1	(財)向日市埋文	4/2~
17	左京241次	7ANXYT	京都市伏見区羽東師菱川山巖手	(財)京都府埋文	4/9~
18	左京243次	7ANLHK	長岡京市馬場人塚1-2	(財)長岡京市埋文	4/11~
19	右京335次	7ANGSN・ 7ANIFC	長岡京市井ノ内下印田・今里更ノ町	(財)京都府埋文	8/4~2/27
20	右京339次	7ANMKI-2	長岡京市東神足二丁目15-2	(財)長岡京市埋文	10/24~
21	右京343次	7ANSIR 他	大山崎町円明寺井尻百々他	(財)京都府埋文	1/8~
22	右京344次	7ANKJC	長岡京市天神一丁目610-2	(財)長岡京市埋文	1/8~2/16
23	右京345次	7ANIFD-7	長岡京市野添二丁目108-1	(財)長岡京市埋文	1/22~2/15
24	右京346次	7ANHTC	長岡京市粟生田内46	(財)長岡京市埋文	1/29~
25	右京347次	7ANKYR-2	長岡京市長岡二丁目22	(財)長岡京市埋文	2/5~3/16
26	右京348次	7ANNSN-4	長岡京市友岡四丁目12	(財)長岡京市埋文	2/20~3/10
27	右京349次	7ANSDE 他	大山崎町円明寺御所ノ内他	(財)京都府埋文	4/9~



▽番号は一覧表・本文（ ）内と対応
調査地位置図

宮内第236次(2)

(財)向日市埋蔵文化財センター

内裏南方官衙の調査である。小面積の調査であるが、長岡京期の掘立柱建物2・柵3が検出された。柱間1mで南北にのびる柵2条と掘立柱建物1棟とは重複関係があり、官衙区画に変化が見られる。

宮内第237次(3)

(財)向日市埋蔵文化財センター

北辺官衙および岸ノ下遺跡・森本遺跡の調査である。長岡京期および中世の遺構・遺物が検出された。長岡京期の遺構は、掘立柱建物4・柵1・溝2があり、近隣の宮内第33次・第169次調査地と同様、小規模な建物が重複して建ち並ぶ。中世の遺構は、南北方向の溝約30である。

左京第235次(11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

左京五条二坊二・三町および雲宮遺跡の調査である。縄文晩期～弥生前期・長岡京期・中世の遺構・遺物が検出された。長岡京期の遺構は、五条条間小路の両側溝、二町の柵、三町の柵・溝・土坑がある。路幅は溝心々で25m、大路幅にあたる。遺物には、土器類のほか土馬・瓦・墨書土器・石製巡方などがある。

左京第237次(13)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

左京一条三坊十六町および大藪遺跡の調査である。弥生・古墳・長岡京期・中近世の遺構・遺物が検出された。弥生後期の遺構は方形周溝墓から竪穴住居に変化し、勾玉が出土した。古墳時代の遺構は3期に分かれ、掘立柱穴→土壇墓→竪穴住居と変化する。長岡京期の遺構は掘立柱建物2・柵1がある。掘立柱建物の1棟は、南北5間、東西3間以上、柱間3m、総柱の大型倉庫である。中近世の遺構は土壇墓群と溝群がある。

右京第339次(20)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

右京六条一坊四町および神足遺跡・勝龍寺城跡の調査である。縄文～近世の各種遺構・遺物が検出された。縄文時代のものには注口土器と磨石があるが、遺構はみつかっていない。弥生時代の遺構は方形周溝墓12・木棺墓・土壇墓があり、古墳時代のものには竪穴住居がある。長岡京期の遺構は、六条第二小路の両側溝・掘立柱建物・溝・土坑などがある。路幅は溝心々で9.3mを測り、

北側溝からは多量の土器と帯金具が出土しているのに対し、南側溝からはわずかな土器のみであり、三町と四町の宅地の居住者の階層を反映したものとみられる。平安時代の遺構は、掘立柱建物・溝・瓦溜り・土壇墓などがあり、この地の地名の由来となった勝龍寺に関する遺構とみられる。近世勝龍寺城跡の空堀は幅5m、深さ2.1mを測る。

(平良 泰久)

センターの資料活用状況

センターの普及・啓蒙事業の一環として、資料の活用も計っている。以下、1989年度に実施した「資料の貸出」・「資料の掲載等」を掲示しておく。

I 資料の貸出一覧表

	申請者	貸出資料	点数	目的	期間
1	向日市文化資料館	舞塚古墳出土 人物埴輪	1	常設展「長岡京の歴史と文化」に展示	平成元年4月1日～平成2年3月31日
2	府立丹後郷土資料館	志高遺跡出土 縄文土器・磨製石剣	6	常設展「丹後の歴史と文化」に展示	平成元年4月1日～平成2年3月31日
		高山12号墳出土 環頭大刀柄頭ほか	61		
		野崎古墳群出土 家形埴輪・鏡形土製品ほか	5		
3	府立山城郷土資料館	前們中世墓出土 青磁碗・和鏡ほか	一括	常設展「南山城の歴史と文化」に展示	平成元年4月1日～平成2年3月31日
		内田山 A-3号墳出土 家形埴輪	1		
4	亀岡市教育委員会	太田遺跡出土 弥生土器・石器ほか	17	常設展「亀岡の歴史と文化」に展示	平成元年4月1日～平成2年3月31日
		千代川遺跡出土 弥生土器・須恵器	14		
		北金岐遺跡出土 弥生土器・木製品ほか	27		
		医王谷3号墳出土 鉄製品・玉類ほか	88		
		千代川・桑寺遺跡出土 素弁八葉蓮華文軒丸瓦	2		
		篠・西長尾奥1号窯跡出土 須恵器	2		
		篠・西長尾1号窯跡出土 須恵器	5		
		篠・石原畑2号窯跡出土 須恵器	2		
		篠・西長尾5号窯跡出土 須恵器	2		

	申請者	貸出資料	点数	目的	期間
5	府立丹後郷土資料館	正垣遺跡出土 船形木製品ほか 遠所古墳群出土 須恵器 ゲンギョウの山古墳群出土 土 土師器・鉄製品 宮の森古墳群出土 須恵器・土師器ほか 普甲古墳群出土 土師器・玉類 新ヶ尾東古墳群出土須恵器 桃山古墳群出土 須恵器 ・馬具・ガラス小玉一括 高山12号墳出土 須恵器・土師器ほか 西小田古墳群出土 弥生土器・須恵器	2 14 9 27 78 11 15 56 12	特別陳列「弥栄ニゴレ古墳とその周辺」展に展示	平成元年4月7日～ 6月10日
6	亀岡市教育委員会	太田遺跡出土 木製広楾・石製鎌 北山岐遺跡出土木製田舟	2 1	第7回企画展「米・豊かな実りを求めて―大むかしの農具―」に展示	平成元年4月20日～ 6月9日
7	大阪文化財センター	上人ヶ平古墳群出土 形象埴輪片・円筒埴輪片 上人ヶ平遺跡 イラストパネル 上人ヶ平1号墳輪窯跡全景 4×5リバーサル	6 1 3	第2回「府民のための大阪考古学情報展」に展示	平成元年6月20日～ 10月2日
8	府立山城郷土資料館	日光寺遺跡出土 青磁碗 遠所古墳群出土 須恵器・土師器 休場古墳出土 須恵器・紡錘車ほか 温江遺跡出土 木製梯子・土師器ほか 桑飼上遺跡出土 土師器・玉類一括ほか 興遺跡出土 分銅形土製品・かんざし 私市円山古墳出土 玉類一括	2 16 30 11 8 2 3	企画展「発掘成果速報―昭和63年度の調査から―」に展示	平成元年9月5日～ 10月13日

	申請者	貸出資料	点数	目的	期間
8	府立山城郷土資料館	青野西遺跡(第4次調査)出土 弥生土器・土師器 千代川遺跡(第14次調査)出土 須恵器・土師器ほか 平安京跡(左京近衛・西洞院辻)出土 陶磁器・金箔瓦ほか 長岡宮跡(第205次)出土 須恵器・円面硯ほか 長岡京跡(左京第202次)出土 須恵器・墨書土器ほか 長岡京跡(右京第310次)出土 墨書土器・木簡ほか 小田垣内遺跡出土 石仏 上人ヶ平遺跡出土 軒瓦・埴輪ほか 幣羅坂古墳出土 玉類一括 上記各遺跡パネル	4 12 9 11 7 6 3 8 1連 42		
9	京都文化財団	古殿遺跡出土 木製案 太田遺跡出土 朝鮮系無文土器	1 9	歴史企画展「海を渡って来た人と文化—古代日本と東アジア—」に展示	平成元年9月7日～11月15日
10	八雲立つ風土記の丘資料館	志高遺跡出土 縄文土器・磨製石剣 青野遺跡(第6次調査)出土 磨製石剣 古殿遺跡(第2次調査)出土 土師器 谷内遺跡出土 土師器 高山12号墳出土 双龍環頭柄頭 古殿遺跡・新ヶ尾東古墳群・高山12号墳・青野遺跡の写真パネル	4 1 6 1 2 4	特別展「古代の出雲と北陸—日本海が結ぶ古代の日本文化—」に展示	平成元年9月20日～11月20日
11	向日市文化資料館	園部垣内古墳出土 三角縁三仏三獣鏡(センター寄託)	1	開館5周年記念特別展「乙訓の古墳文化」に展示	平成元年9月27日～11月27日

	申請者	貸出資料	点数	目的	期間
12	県立橿原考古学研究所 附属博物館	志高遺跡出土弥生式土器 志高遺跡貼石墓 4×5 カラーリバーサル	7 2	秋期特別展「弥生・動乱の時代—吉野ヶ里遺跡の同時代史—」に展示	平成元年10月7日～ 11月1日
13	綾部史談会	私市円山古墳写真パネル	8	第37回綾部総合文化祭に展示	平成元年10月24日～ 11月7日
14	木津町教育委員会	上人ヶ平古墳群出土 馬形埴輪ほか 上人ヶ平遺跡出土 軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦 上人ヶ平遺跡写真パネル	4 3 3	第3回木津町文化祭「ハートピア in きづ」に展示	平成元年11月1日～ 11月6日
15	丹波町教育委員会	塩谷古墳群出土 巫女形埴輪・須恵器 塩谷古墳群 モノクロキャビネ 4×5 カラーネガ	11 2	「花と緑のフェスティバル及び丹波町ふるさとカーニバル」に展示	平成元年11月2日～ 11月20日
16	綾部市教育委員会	私市円山古墳 発掘調査風景 35mm カラーリバーサル	37	綾部市内における学校学習・歴史講座等に使用(原版複写)	平成元年11月15日～ 11月22日
17	(財)京都こども文化会館	日光寺遺跡・遠所古墳群 ほか 写真パネル	23	京都こども文化会館エンゼルギャラリーに展示	平成元年11月15日～ 平成2年1月15日
18	大阪市立東洋陶磁美術館	平安京跡(左京近衛・西洞院辻)出土 華南 三彩盤・国産陶磁器ほか	50	東洋陶磁学会第17回大会特別展示	平成元年11月17日～ 11月21日
19	綾部市豊里地区公民館	三宅遺跡出土 弥生土器・瓦器・鏡形土製品, 航空写真パネル 小西町田遺跡出土 弥生土器・須恵器・緑釉陶器, 航空写真パネル	9 11	豊里地区文化祭に展示	平成元年12月1日～ 12月4日
20	三重県埋蔵文化財センター	長岡宮跡(第164次)出土 緑釉唾壺	1	「緑釉陶器の流れ」展に展示	平成2年1月20日～ 3月10日
21	伏見信用金庫向日町支店	長岡京跡関係遺跡 各種パネル	16	ロビー展示	平成2年2月28日～ 3月16日
22	京都銀行向日町支店	桑飼上遺跡その他 各遺跡パネル	7	ロビーアクション	平成2年2月16日～ 3月2日

II 資料の掲載等一覧

	申請者	提供資料	点数	内容	目的	期間
1	読売新聞社 出版局図書 編集部	椿井大塚山古墳 航空写真 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	『吉野ヶ里・藤ノ木 ・馬台国一みえて きた古代史の謎ー』	平成元年5月18日～ 7月6日
2	朝日新聞社出 版局アサヒグ ラフ編集部	上人ヶ平遺跡 埴輪窯跡全景 4×5判リバーサル 35mm判リバーサル	2	貸出 掲載	『アサヒグラフ』 7月14日号	平成元年6月13日～ 7月31日
		〃 出土埴輪 35mm判リバーサル	2	〃		
		私市円山古墳検出遺構 6×7判リバーサル 35mm判リバーサル	4	〃		
		私市円山古墳出土遺物 35mm判リバーサル	3			
3	有斐閣書籍 編集部	志高遺跡方形貼石墓 モノクロ写真	1	掲載	『探訪 弥生の遺跡 ー畿内・東日本編 ー』	
4	(株)月刊ナ ンバーワン 編集部	ヌクモ2号墳出土 龍虎鏡 35mm判リバーサル	1	貸出 掲載	『月刊日本一』(第2 巻第5号)	平成元年6月20日～ 8月10日
5	(株)パンク リエイティブ	私市円山古墳全景 6×7判リバーサル	1	貸出 掲載	『MOVEUS』第14号	平成元年7月17日～ 8月17日
		私市円山古墳出土 胡鏡金具 35mm判リバーサル	1			
6	向日市文 化資料館	舞塚古墳出土 人物埴輪モノクロ写真	1	掲載	特別展示図録『乙訓 の古墳文化』	
		園部垣内古墳出土 三角縁三仏三獣鏡 モノクロ写真	1			
7	有限会社ク バプロ「大学と 科学」公開シ ンポジウム講 演集編集部	木津川河床遺跡 噴砂・足跡 モノクロ写真	2	掲載	講演収録集『新しい 研究法は考古学にな にをもたらしたか』	
8	中央公論社 書籍編集部	木津川河床遺跡 噴 砂の状況モノクロ写真	2	掲載	『図説日本の古代』2 「木と土と石の文化」	
9	府立丹後 郷土資料館	志高遺跡出土 縄文土器モノクロ写真	2	掲載	展示解説リーフレッ ト	
10	舞鶴市史 編さん室	志高遺跡検出 住居跡 ・貼石墓モノクロ写真	4	掲載	『舞鶴市史』上巻	
		志高遺跡出土 弥生土器・有樋式石剣 モノクロ写真	8			
		橋爪遺跡出土 田下駄モノクロ写真	2			
11	弥栄町教 育委員会	遠所古墳群全景 空撮モノクロ写真	1	掲載	『弥栄町の文化財』	
12	(株)日本 映画新社	上人ヶ平遺跡全景・検 出遺構・遺物・イラスト		撮影 編集	映画『美しい日本の 甕』	撮影日 平成元年10月26日

	申請者	提供資料	点数	内容	目的	期間
13	朝日新聞社出版局アサヒグラフ編集部	上人ヶ平遺跡検出遺構 4×5判リバーサル 奥大石2号墳全景 35mm判リバーサル ヌクモ2号墳出土 龍虎鏡 奥大石2号墳出土 蛇行剣 塩谷5号墳出土 巫女形埴輪	1 1 1 1 1	貸出掲載 " 撮影掲載 " "	『アサヒグラフ』12月29日号	貸出し期間 平成元年11月24日～ 平成2年1月15日 撮影日 平成元年11月7日 平成元年11月21日
14	ジャパン通信社	上人ヶ平遺跡 全景・検出遺構・ 遺物・イラスト各写真	6	掲載	『月刊文化財情報』 12月号	
15	中央公論社書籍編集部	園部垣内古墳出土 鏡・車輪石・石剣・碧玉製鏃	27	撮影掲載	『図説日本の古代』6 「諸王権の造型」(* 承諾)	撮影日 平成元年12月4日
16	(株)至文堂編集部	私市円山経塚・大道廃 寺経塚検出状況 各モノクロ写真	2	掲載	『日本の美術』(『経 塚とその遺物』)	
17	京都考古刊行会	福垣北古墳銅鏡出土状 況写真、ヌクモ2号墳 出土 龍虎鏡写真	2	掲載	『京都考古』第53号	
18	(財)関西文化学術研究都市推進機構	上人ヶ平遺跡出土 瓦写真・イラスト図 上人ヶ平遺跡出土 埴 輪写真・埴輪窯復原図	3 3	掲載	『学研都市風土記』	
19	(株)京都民報社	私市円山古墳 航空写真	1	掲載	連載「まちと暮らし の京都史」第7回 「倭の五王の頃」	
20	木津町長	上人ヶ平遺跡出土遺物 ・写真・イラストなど		撮影	KBS 京都テレビ 京 都ふるさと案内『木 津町』	撮影日 平成2年2月16日
21	中央公論社書籍編集部	塩谷5号墳出土 巫女形埴輪	1	撮影掲載	『図説日本の古代』5 「古墳から伽藍へ」	撮影日 平成2年2月26日
22	(株)京都民報社	三宅遺跡 土壌墓群の写真	10	掲載	連載「まちと暮らし の京都史」第9回 「解明進む丹後・丹 波の古墳時代」	
23	中央公論社書籍編集部	郷土塚4号墳出土 鍛冶道具及び鉄製品	10	撮影掲載	『図説日本の古代』5 「古墳から伽藍へ」	撮影日 平成2年2月26日
24	平凡社編集部 書籍部	長岡宮跡第164次出土 緑釉唾壺	1	撮影掲載	『日本陶磁大系』5 「三彩 緑釉 灰釉」	撮影日 平成2年2月26日
25	中央公論社書籍編集部	園部垣内古墳出土 管玉・勾玉 4×5判リバーサル 奥大石2号墳 主体部全景 35mm判リバーサル 奥大石2号墳出土 蛇行剣モノクロ写真	1 1 1	貸出掲載 " 掲載	『図説日本の古代』5 「古墳から伽藍へ」	平成2年3月9日～ 5月20日

財団法人 京都市埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成2年6月15日現在)

理事長	福山 敏男 (京都大学名誉教授)	事務局長	堤 圭三郎 (京都府教育庁文化財保護課長兼務)
副理事長	樋口 隆康 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	次 長	中谷 雅治 小林 将夫
理 事	中沢 圭二 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	総務課	課 長 小林 将夫 (兼) 総務係 安田 正人 主 事 上田 幸正 杉江 昌乃 今村 正寿 木村 幸世
川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	上田 正昭 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学教養部教授)	調査第1課	課 長 中谷 雅治 (兼) 企画係 奥村清一郎 調査員 磯野 浩光 嘱 託 長関 和男 資料係 平良 泰久 主任 松井 忠春 調査員 田中 彰 土橋 誠
藤井 学 (京都府立大学文学部教授)	足利 健亮 (京都大学教養部教授)	調査第2課	課 長 安藤 信策 調査第1係 水谷 寿克 主任 増田 孝彦 調査員 岡崎 研一 森 正 森島 康雄 石崎 善久 岸岡 貴英 野島 永 調査第2係 辻本 和美 主任 引原 茂治 伊野 近富 調査員 田代 弘 三好 博喜 小池 寛 鶴島 三寿 柴 暁彦
佐原 眞 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長)	都出比呂志 (大阪大学文学部教授)		調査第3係 小山 雅人 主任 戸原 和人 石井 清司 調査員 竹原 一彦 竹井 治雄 石尾 政信 黒坪 一樹 岩松 保 伊賀 高弘 中川 和哉
藤田 价浩 (西芳寺貫主)	竹中 康雄 (京都府文化芸術室長)		
木村 英男 (京都府教育庁指導部長)	堤 圭三郎 (京都府教育庁文化財保護課長)		
監 事	岸 義次 (京都府出納局長)		
前川 靖典 (京都府監査委員事務局長)			

センターの動向(2. 2~4)

1. できごと
2. 2 千代川遺跡(亀岡市)発掘調査現地説明会実施
- 3 長岡京跡右京第335次(長岡京市)発掘調査現地説明会実施
- 7 京都府教育委員会指導監査
- 9 長岡京跡左京第216次(向日市他)発掘調査関係者説明会実施
小谷遺跡・小谷古墳(八木町)試掘調査終了(1.10~)
- 9~10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(和歌山県)出席(山本次長・中谷次長・安田係長)
- 13 佐原 眞理事, 発掘調査視察
- 14~23 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財技術者等研修「土器課程」参加(森調査員)
- 16 興戸遺跡(田辺町)発掘調査現地説明会実施
小谷古墳状隆起(福知山市)試掘調査開始
中海道遺跡(向日市)発掘調査終了(11.20~)
- 17 第55回研修会開催(別掲)
- 21 里遺跡(綾部市)発掘調査関係者説明会実施
長岡京連絡協議会開催
- 22 足利健亮理事, 千代川遺跡視察
桜内遺跡(加悦町)発掘調査終了(11.13~)
- 23 内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査関係者説明会実施
天若遺跡(日吉町)試掘調査終了(12.8~)
- 26 瓦谷遺跡(木津町)発掘調査終了(4.10~)
- 27 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主催「全国遺跡データベース研究会」出席(土橋調査員)
桑飼上遺跡(舞鶴市)発掘調査終了(4.18~)
千代川遺跡発掘調査終了(7.18~)
内里八丁遺跡発掘調査終了(5.12~)
興戸遺跡発掘調査終了(11.9~)
3. 3 遠所遺跡群(弥栄町)発掘調査終了(4.11~)
小谷古墳状隆起試掘調査終了
仏南寺城跡(綾部市)試掘調査終了(12.12~)
里遺跡発掘調査終了(10.17~)
- 6 八木嶋遺跡(八木町)発掘調査終了(12.11~)
- 7 「10周年記念特別展覧会」企画委員会開催一於・京都堀川会館
- 9 佐原 眞・都出比呂志理事, 長岡京跡左京第216次発掘調査現地視察
同発掘調査終了(4.4~)
上人ヶ平遺跡(木津町)発掘調査終了(4.10~)
- 27 第27回役員会・理事会開催一於・平

- 安会館一福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，荒木昭太郎常務理事，中沢圭二・川上 貢・上田正昭・藤井 学・足利健亮・佐原 眞・都出比呂志・堤圭三郎の各理事，堂端明雄監事出席
- 28 長岡京連絡協議会開催
- 31 退職職員辞令交付(別掲)
4. 1 新規採用職員辞令交付(別掲)
人事異動(別掲職員一覧表参照)
- 3 桑飼上遺跡(舞鶴市)発掘調査開始
遠所遺跡群(弥栄町)発掘調査開始
- 3~5 新規採用職員研修
- 4 長岡京跡左京第216次(長岡京市)発掘調査開始
- 5 瓦谷遺跡(木津町)発掘調査開始
- 9 長岡京跡左京第241次(京都市)発掘調査開始
長岡京跡左京第242次(向日市)発掘調査開始
長岡京跡右京349次(大山崎町)発掘調査開始
- 10 内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 12 横浦経塚(久美浜町)発掘調査開始
山形古墓群(久美浜町)発掘調査開始
- 13 全国埋蔵文化財法人連絡協議会 近畿ブロック会議(大阪市)出席(荒木局長，中谷次長，安田係長)
- 下後古墳群(弥栄町)発掘調査開始
太田古墳群・太田南古墳群(弥栄町)発掘調査開始
- 17 職員(調査員)採用試験実施
八木嶋遺跡(八木町)発掘調査開始
- 23 京都大学北部構内遺跡(京都市)発掘調査開始
- 24 里遺跡(綾部市)発掘調査開始
興戸遺跡(田辺町)発掘調査開始
- 25 長岡京連絡協議会開催
2. 普及啓発事業
- 2.17 第55回研修会開催一於・長岡京市立産業文化会館：最近の都城の発掘調査一森下 衛「加茂町恭仁宮跡の発掘調査」，國下多美樹「向日市長岡宮跡の発掘調査〈北辺官衙(北部)検出の礎石建物について〉」，田辺征夫「平城京跡の最近の調査」
3. 人事異動
- 3.31 上田 将理事退任
山本 勇次長兼総務課長・林 淳次主事・鍋田 勇調査員・荒川 史調査員退職
4. 1 木村英男理事新任
上田幸正主事・岸岡貴英調査員採用

受贈図書一覧(2.2~2.4.16)

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第53集
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.47
秋田県埋蔵文化財センター	秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第4号
(財)栃木県文化振興事業団	栃木県埋蔵文化財調査報告 第96集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	埋文群馬 No.7・8合併号, 菩提木遺跡, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第97~98・101集
(財)市原市文化財センター	私たちの文化財 14, 第5回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨, (財)市原市文化財センター研究紀要 I, (財)市原市文化財センター調査報告書 第20・34集
山梨県埋蔵文化財センター	年報5—昭和63年度—, 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第39・48集
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第30号
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 6・9
(財)浜松市文化協会	都田地区発掘調査報告書
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No.20
三重県埋蔵文化財センター	第9回 三重県埋蔵文化財展「緑釉陶器の流れ」
(財)滋賀県文化財保護協会	文化財教室シリーズ 110~111, 滋賀文化財だより 141~143, 埋蔵文化財調査研究会—発表要旨—, 滋賀県文化財目録(平成元年度追録), ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVII-5
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第118~120号
(財)大阪府埋蔵文化財協会	第5回 泉州の遺跡~5年間の発掘調査成果~
(財)大阪市文化財協会	葦火 24号
(財)東大阪市文化財協会	鬼虎川遺跡調査概要II 遺物編(木製品), 神並古墳群遺跡第3次発掘調査報告
(財)枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより 第2号
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 17・19, 跡部遺跡—八尾市春日町—銅鐸
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所年報13 昭和61年度, 橿原考古学研究所紀要考古学論攷 第12~13冊
(財)元興寺文化財研究所	(財)元興寺文化財研究通信 No.33
(財)広島県埋蔵文化財センター	ひろしまの遺跡 第40号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.200~201
(財)香川県埋蔵文化財調査セン	香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度~昭和62年度, 同 昭和63

ター	年度，四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(昭和63年度)，一般国道11号高松東バイパス建設及び県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告 II
群馬県教育委員会	昭和62年度 群馬県荒砥北部遺跡群発掘調査概報，昭和62年度 荒砥北部遺跡群発掘調査報告，昭和63年度 荒砥北部遺跡群発掘調査報告
木更津市教育委員会	千束台遺跡確認調査報告書，市内遺跡群発掘調査報告書—伊豆島貝塚・宮脇遺跡—，請西遺跡群発掘調査報告書 II，丹過遺跡確認調査報告書 II
東金市教育委員会	平成元年度 東金市内遺跡群発掘調査報告書～小野遺跡B地区～
小平市教育委員会	鈴木遺跡範囲確認調査報告書 平成元年度
武生市教育委員会	武生市埋蔵文化財調査報告書 VII～VIII
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書 第5輯
鈴鹿市教育委員会	鈴鹿市文化財調査報告 VII
新旭町教育委員会郷土資料室	郷土資料室だより 第5号
泉佐野市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 IX，日野根遺跡 88-6区の調査，湊遺跡 89-2区調査の報告
大東市教育委員会	特別展 近世大東の新田開発—大和川の付替えと深野池—
豊中市教育委員会	文化財ニュース豊中 No.11～12，豊中の文化財
神戸市教育委員会	昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報，昭和63年度 遺跡現地説明会資料，神戸市須磨区戎町遺跡第1次発掘調査概報，日暮遺跡発掘調査報告書
宝塚市教育委員会	宝塚市文化財資料 8
姫路市教育委員会	姫路の文化財(第2巻)—地域別文化財—
高取町教育委員会	高取町文化財調査報告 第8冊，高取町埋蔵文化財発掘調査報告 第9集
和歌山県教育委員会	昭和63年度 根来寺坊院跡，昭和63年度 広域遺跡群詳細分布調査概報
日南町教育委員会	多里層の化石，日南町教育委員会文化財報告書 4
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 8
御津町教育委員会	御津町埋蔵文化財発掘調査報告 5
大川町教育委員会	富田茶臼山古墳発掘調査報告書
唐津市教育委員会	唐津市文化財調査報告 第34～36集
熊本市教育委員会	大江遺跡群—大江遺跡群第1次調査区発掘調査報告書—
大分県教育委員会	大分県文化財調査報告書 第80集，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 1，飯田二反田遺跡 一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う発掘調査概報 I，笠松・尾畑・桐ヶ迫・峰添・正

西之表市教育委員会	布迫・柳沢・向山・下林遺跡 一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う発掘調査概報 II, 植田市遺跡 II, 大分県玖珠郡玖珠町所在集落遺跡発掘調査報告書 小田遺跡群 II 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 6
東北歴史資料館	東北歴史資料館研究紀要 第14巻, 東北歴史資料館資料集 22・26
秋田県立博物館	博物館ニュース No. 80
国立歴史民俗博物館	歴博 第39号, 国立歴史民俗博物館データベース利用申請の手引き, 国立歴史民俗博物館データベース検索の手引き
流山市立博物館	資料目録 第9集
成田山霊光館	なりた No.47, 図録「祈りとまつり」, 図録「成田山ゆかりの人々 II」
出光美術館	出光美術館館報 第68号
調布市郷土博物館	郷土ウォッチング No.3, 調布の文化財 第7号, 展示解説シート No.7~12, 調布市郷土博物館だより No.33
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第44号
珠洲市立珠洲焼資料館	珠洲の名陶
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより No.20
茅野市尖石考古館	茅野市の博物館だより八ヶ岳通信 No.2, 芥沢遺跡—諏訪南インター林間工業団地上水道施設用地に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—
浜松市博物館	浜松市博物館だより No.27, 同 No.28・29合併号, 浜松市博物館館報 II
沼津市歴史民俗資料館	資料館解説シリーズ 19, 資料館だより 89~90
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No.12(昭和63年度)
蒲郡市博物館	竹谷松平氏—西ノ郡の殿様—
斎宮歴史博物館	斎宮歴史博物館だより No.3~4, 河南省文物展
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 第68号
彦根城博物館	彦根城博物館だより 8
神戸市立博物館	博物館だより No.31
豊岡市立郷土資料館	駄坂・舟隠遺跡群, 上鉢山・東山墳墓群—発掘調査の記録—
播磨町郷土資料館	館報 1989
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	大和を掘る~1988年度発掘調査速報~, 橿原考古学研究所50周年記念特別展 石舞台からの藤ノ木古墳
岩出町民俗資料館	89秋季特別展 漆塗の美「根来塗」
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No.100
出雲玉作資料館	玉作資料館ニュース 第13号
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 第2号, 広島県立博物館展示案内

(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 37~38
福岡市立歴史資料館	福岡市立歴史資料館研究報告 第14集, 福岡市立歴史資料館年報 No. 17(昭和63年度)
佐賀県立博物館	タイムトラベル1990—九州横断道発掘成果展—
佐賀県立九州陶磁文化館	セラミック九州 No. 20
長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館だより No. 105~106
山鹿市立博物館	山鹿市立博物館調査報告書 第8~9集
鹿児島県歴史資料センター黎明館	鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録(VI)
東北学院大学東北文化研究所	東北学院大学論集(歴史学・地理学) 第21号
山形大学山形史学会	山形大学史学論集 第10号
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース 18号
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室	早大埋蔵文化財調査室月報 No. 55~59
法政大学	法政大学多摩校地城山地区風間遺跡群発掘調査報告書
名古屋大学文学部考古学研究室	考古資料ソフテックス写真集 第5集
愛知学院大学文学部	愛知学院大学文学部紀要 第19号
大阪大学文学部	待兼山論叢 第23号
大谷女子大学資料館	大谷女子大学資料館報告書 第21~24冊
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第23号
大手前女子大学史学研究所文化財調査室	文化財調査室だより「いな の」 No. 1~2
奈良大学文学部考古学研究室	文化財学報 第6集(井上久先生追悼論集)
鳥取大学教育学部	大熊段遺跡G区発掘調査報告書
別府大学付属博物館	松山遺跡
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第41号
鶴川第二地区遺跡調査会	真光寺・広袴遺跡群 III
沼間三丁目遺跡調査会	沼間三丁目遺跡群—沼間ポンプ場南台地遺跡・菅ヶ谷台地遺跡—
中央公論社	図説日本の古代 第4巻
(株)名著出版	歴史手帖 第197~198号
(財)古代学協会	土車 第53号, 古代文化 第373~375号
大阪・郵政考古学会	郵政考古紀要 第24冊
妙見山麓遺跡調査会	神戸市灘区都賀遺跡 I
朝鮮学会	朝鮮学報 第133~134輯
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第16号

国立晋州博物館	国立晋州博物館遺跡調査報告 第3冊
(財)京都文化財団	京都文化博物館研究紀要 第2集, 京都文化博物館調査研究報告 第4集
京都府教育委員会	埋蔵文化財発掘調査概報 1989
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第14集
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第16集
田辺町教育委員会	田辺町埋蔵文化財調査報告書 第11集
笠置町教育委員会	笠置町と笠置山—その歴史と文化—
加茂町	加茂町史編さんだより紫陽花 第8号
京都市文化観光局文化部文化財保護課	京都市文化財ボックス 第5集, 京都市の文化財—京都市指定・登録文化財 第7集—
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館だより 第11号
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館友の会ニュース 第10号
京都府立総合資料館	総合資料館だより No.83
(財)京都府文化財保護基金	文化財報 No.68
(財)京都古文化保存協会	会報 第68号
大谷大学文学部	大谷大学史学論究 第1~3号
仏教大学図書館	鷹陵史学 第15号
立命館大学文学部学芸員課程	学芸員NEWSLETTER 第2号
福知山史談会	史談ふくち山 第451~453号
綾部史談会	私市円山古墳, 綾部史談 創立40周年記念特集号
宗教法人 正法寺	京都府指定文化財正法寺書院修理工事報告書
京都考古刊行会	京都考古 第53~55号
中谷雅治	跡部遺跡—八尾市春日町出土—銅鐸
土橋誠	第3回 考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状

—編集後記—

梅雨に入り、うっとおしい毎日が続きますが、情報36号が完成しましたのでお届けします。

本号は、年度当初の情報ですので、今年度調査予定の遺跡と、昨年度調査成果のまとめを掲載しました。また、今回は、当調査研究センターが調査を実施した遺跡のうち、特に成果のあった3遺跡について、概要を載せました。

また、資料紹介として、京都府竹野郡弥栄町の遠所遺跡で出土した銅鏃について投稿がありました。よろしく御味読下さい。

(編集後記=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第36号

平成2年6月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)